
進む先に見つけた場所

黒崎メグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

進む先に見つけた場所

【Nコード】

N9014K

【作者名】

黒崎メグ

【あらすじ】

時を渡り旅をする存在、時の旅人。新撰組の沖田総司も時の旅人の一人だった。不老不死の体を持つ時の旅人である彼が、なぜ病で死に至ったのか。そこには語られざる思いがあった。

*時の旅人【幕末編】に修正を加えました。

失った場所

夕焼けのように紅くすべてを包んでいくのは炎だった。

目前に広がる木造造りの長屋を伝い、炎が走っていく。崖を背にして立つ屋敷の正面に、扇状にして広がる城下町が燃えている。

あちこちから子供の泣き声が響き、肉の焼け焦げる嫌な臭いが鼻についた。

蒼矢は走りながらその臭いに思わず眉を寄せる。その背後では彼を呼び止める声があがっている。

「若様！」

しかし、蒼矢は足を止めようとはしない。その声が蒼矢を屋敷から連れ出した家臣の声だとわかっていたからだ。跡継ぎを無事に逃がすという家臣の役目もわからないでもないが、蒼矢にとってはこの場を離れること以上に大切なことがあった。彼は屋敷に残してきた両親のことが気がかりでならなかったのだ。

蒼矢は伸びてきた腕に反発し、目に前に広がる炎のに飛び込んだ。瞬間、辺りを包む熱と煙が、蒼矢の退路を断った。尚も蒼矢を呼ぶ声が炎の壁を越え聞こえたが、彼には戻る気などなかった。次第に増す熱に息苦しさを覚えながらも蒼矢は進む。

するといつのまにか熱さは不思議と感じなくなっている。その頃になると、蒼矢の全神経は屋敷へと向いていた。

蒼矢は屋敷に残った父と母の元に行きたい一心で、炎の中を懸命に走った。

そして、やっと辿り着いたのは屋敷の大広間であった。父が家臣たちとの会議に使う、板張りの間だ。普段ならそこに敷かれているのは、人数分の薫り高いイグサで編まれた座布団なのだが、この日はかりは違っていた。

広間の最も上座、いつも父が座っている場所に赤い水たまりが出てきている。

蒼矢は一瞬、炎の照り返しかとも思った。

けれどそうでないことはすぐに知れた。板の間を濡らすのは、水ではない――血だ。ゆらゆらと炎の光を反射して、それはまるで生きているようであった。そのことに恐怖を感じ目を逸らそうとした蒼矢は、視界の端を掠めたその光景に思わず動きを止めた。

「嘘……そんな……」

その血だまりの中にあるのは間違いなく蒼矢の両親の身体である。蒼矢は思わず煤を帯びた板張りの床にへたり込んだ。彼を逃がした後、二人はやむなく自決したのだろう。その事実を信じたくなくて、蒼矢は床を這えず、二人に傍らまで身を進めるた。

血がべつとりと衣に纏わりつく。しかし蒼矢は気にしなかった。

その血の温かみを逃がすまいとして、そのまま母の胸にすり寄った。だが僅かにぬくもりを残す母の身体は、もうすでに鼓動を刻んではいなかった。

その事実を目の当たりにして、蒼矢は瞼の裏が熱くなるのを感じた。

「……あつ、ああつ……」

蒼矢は母の胸に縋るように泣いた。流した涙が頬に負った火傷に沁みたが、火傷の痛み以上に蒼矢の心は痛んだ。

「二人は、僕が生き残れば御家再興は可能だと言ったよね。でも、そこに父様と母様が居なければ、それは僕にとって無意味なものなんだ……」

たかだか六歳の蒼矢にとって、父こそが世界、母こそが光。だからこそ、今、両親の死に蒼矢は悲嘆にくれた。世界の崩壊をただ受け入れることしかできない自身の無力に憤りを感じている。

「僕にもつと力があれば、父様と母様を守れただろうか」

と、蒼矢は嗚咽を噛み殺すように唇を噛んだ。込み上げてくる後悔の念である。けれども、その後悔も無意味なものかもしれない。世界が崩壊し光を失った今、結局、蒼矢には世界と共に滅びる道しかない。

その決心の基、蒼矢は懷に仕舞っていた短刀を構えた。

「父様、母様、今行くからね……」

蒼矢は、父と母の顔を思い浮かべ、ゆっくりと瞼を閉じた。次に瞼を上げた時、目の前には自分を抱きしめてくれる父と母の姿があることを切に願った。そして、蒼矢は冷たい刃先を首の動脈に向けて構えた。

しかし、蒼矢はその刀を走らせた瞬間の事を覚えていない。

（僕は本当に死んだのだろうか？）

痛みはもちろん、血の温かさや手にしていた筈の刀の感触も全く感じはしなかった。だが、蒼矢の傍らには確かに熱を持った存在がある。蒼矢が望んだとおり、両親の姿があるのかもしれない。けれども、その希望が違っていた時の恐怖を思い、蒼矢は瞼を開けることを戸惑った。

そんな蒼矢の葛藤を余所に、

「泣いてる子がいる思うて来てみれば、まったく、死んでなんになるというんや」

と聞きなれない声が耳元で聞こえる。そこで、ようやく蒼矢はゆっくり瞼を上げた。

目に入ってきたのは金色の髪に同じ色の瞳を持った十六、七だろう青年の姿である。その見たことのない髪色に蒼矢は、仏の化身が自分を迎えに来たのか、と錯覚をおこしそうになった。

けれど彼が手にあるのは自分が手にしていたはずの刀である。その刀には血は付いていない。蒼矢は首筋に触れたが、手に纏わりつく嫌な感触は存在しなかった。そして、目の前には冷たくなりつつある両親の亡骸がなおも横たわっている。

ここは死後の世界ではなく、そして、青年も仏の化身などではない。そう結論付けて、蒼矢はいつでも応戦できるように態勢を整えると、男を探るような目で見詰めた。

男は蒼矢のあまり友好的とはいえない態度に眉を顰める。

だが諦めたように溜め息を吐き、人好きの良い笑顔を浮かべた。

「そんなに怖い顔せんどいてえな。わいは、あんさんの敵やないんやで」

と男は言う。

しかし、男の手にはいまだ蒼矢の刀が握られたままである。だから、蒼矢はその言葉を鵜呑みにできなかった。その事に気付いたのか男は蒼矢と刀を順に見詰め、

「あんさんが自害せんようにちよいと預かせてもろたんよ」

と刀を畳の上に丁寧の下ろし、肩を竦めてみせた。そんな男の動作を蒼矢はあっけらかんと見詰める。

「あんた、いったい何者？」

男に対する警戒心は、先ほどの男の行動で些か和らいでいたが、彼の正体や目的といったものが見えてこない。

「わいは、あんさんを迎えに来た案内人やで」

「案内人？」

「せや、導き手にして、時の案内人。名を遥華^{はるか}」

「……導くつて、あの世へ？」

蒼矢の口からでた物騒な言葉に、遥華は力いっぱい首を横に振った。

「ちゃう、ちゃう。まだ若いのにそんなこと言うもんやないで……。わいの仕事は、時の旅の案内をすること」

「時の旅が何なのか知らないけど、僕はここで死ぬつもりだから、案内してもらう必要なんてないよ」

蒼矢は唇を尖らせてそっぽを向いたが、男は諦めていないようだ。蒼矢の顔にそつと手を伸ばす。父と母以外に、初めて触れられたその感触に、警戒心を忘れ蒼矢は男の行動を享受した。男はそのまま蒼矢の頬をその手で包み、自分と向き合わせる。

「あんさんの両親は、あんさんが共に死することを望んでいたと思うんか？」

遥華の言い分に蒼矢は、言葉を詰まらせた。蒼矢とてわかっていゝる。両親が自分が共に死ぬことを望んでいないことくらい。そうで

なければ、配下の者たちに自分のことを託したりはしなかっただろう。

「あんさんは、何かを守る力が欲しいんやろ？ だったら、まず、両親の思いを守り通してみい。生きて、旅に出てみい。世界は、ここだけやないのやから」

遥かは蒼矢の両頬から手を離すと、ずっとその手を眼前に差し出した。蒼矢は冷たくなった両親の亡骸と遥華の手を交互に見比べる。少しの迷いがあつた。けれども、恐る恐るといった感じで、結局は遥華の手を取った。

「ようこそ、蒼矢。今日から、時の旅人の仲間入りや」

時を駆け永遠を生きる者。それが、時の旅人という存在――。

失った場所（後書き）

* 文章に多少修正は加えていますが、五年以上前の作品です。
古い作品ではありますが、ご意見ご感想残していただけると嬉しいです。

見つけた場所

風の通り道である縁側でうとうととしていた総司は、竹刀のぶつかり合う音に重たげにその頭を上げた。

緑薫る穏やかな風が頬を撫でていく。だが、背中には嫌な汗がじわりと浮かんでいた。その汗に心地悪さを感じて、総司は今まで見ていた夢を振り払うかのように頭を振る。すると、いつの間にか縁側には影がさし、道場に続く通路からにゅっと人が現れた。

「大丈夫か、総司」

総司は呼ばれた声に振り返る。そして相手の姿を捉えて、その顔にようやく安堵の色を浮かべた。

「近藤先生」

「練習熱心なのもいいが、この暑い中倒れたりしたら敵わんかな。気をつけるよ」

稽古で流した汗を手拭いで拭いながら、近藤はどかりと隣に腰を下ろす。古い縁側の板がギシリと鳴って、お互いに顔を見合わせ苦笑する。

「別にそんな軟じゃありませんよ。ただ、昔の夢を見ただけです」

「何だ、総司。お前また稽古さぼって昼寝していたのか？ こりゃ、俺の心配し損じゃないか」

「先生、失礼ですよ。ちゃんと稽古は終わらせてあります」

「うん、そうか。偉い、偉い」

近藤は豪快に笑いながら総司の頭をわしゃわしゃと撫でる。

いつまで経っても子供扱いする近藤に、初めこそ反発していたけれど、何を言っても無駄だと諦めがつくと意外と心地よい。

そう思うようになったのだから重症かもしれない。

総司は、一通りその洗礼を受けると、大きく伸びをして腰を上げた。道場の方から、土方が近藤を呼ぶ声が聞こえている。

「先生、土方さんたちが呼んでいますよ。行きましょう」

そう言つて促すと、促されるまま近藤は立ち上がった。

「おい、近藤！　まだかよ！」

立ち上がった早々、聞こえてきた大声に、近藤は慌てて掛けていく。せつかちな原田が騒ぎ出したのだろう。道場の床をどんっどんと鳴らしながら騒ぎ立てる原田の姿が目には浮かぶようで、総司は笑いを堪えるのに必死だった。

「原田、お前つて言う奴はー！」

近藤の怒鳴り声と共に、板張りの床からこちらまで振動が伝わる。総司は今度こそ堪えきれずに吹き出した。

笑いが絶えない新しい世界。そこはとても居心地が好くて、総司はいつも救われる。だからこそ、この世界はもう二度と失いたくはないと思えるのだ。

旅立ち【1】

それは寒さも峠に差し掛かった季節のことであつた。

午前中の稽古が終わり、皆が集まつた昼食の席で近藤が何の脈絡もなくぽつりと呟いた言葉に沈黙が辺りを支配した。

「浪士組に加わろうと思う」

この場に近藤がこの度新設される浪士組のことを気に掛けていることを知らなかった者はいない。さらにいえば、もし近藤が参加の意を示せば、行動を共にすること決意していた者も多かった。

けれどもこれも突然話を切り出されたら言葉に詰まるのは当然のことだ。

それはこのような場で軽々しく言葉にするものではない。けれどもその中で、総司だけは違う意味で困惑していた。

総司は唯一人、近藤が浪士組に加わることに反対だったのだ。

「もうそれは決心したことなんですか……」

声を縛り出すように総司は問い掛けた。

この場で反対の本当の理由を言えたら、どんなによかつただろう。けれども、その言葉を口にしたところで近藤の決意が変わらないことは、総司自身が一番よく理解している。近藤は一度決めたことはなんとしてもやり通す男だ。

「なんだ、総司は反対なのか？」

「僕は嫌な予感がするんです」

近藤の顔を真正面から見ることができず、総司は俯いた。

隣に座っていた原田がその顔を覗き込み、からからと笑う。

「おい、総司何行く前から怖気づいてんだよ」

（怖気づいている？ 確かに僕は怖い）

「総司、何も皆についてこいと言っているわけじゃないんだぞ。来たくないなら来たくないでそれでいいんだ」

「違います。近藤先生とはご一緒します。でも……」

（待つているのは死だ……）

それは時の旅人だから知っている事実だ。歴史に定められた運命のことを思い唇を噛み締める。

これを許せば、後々近藤は死ぬことになるだろう。こうなることは知っていたけれど、まだ気持ちの整理が付けきれずにいた自分が憎らしい。

けれど総司には近藤達との決別など考えられるはずもない。

だからこそ、どうしても、気持ちの整理を付ける時間が欲しいかった。感情を悟られないように、全身に力を込めた状態で、総司は立ち上がった。その拍子に、腕がひっくり返り、まだ中に残っていた味噌汁がこぼれたが、総司には気にする余裕などない。

「お、おい、総司、どこ行くんだった？」

隣の席についていた土方が総司の動きに沈黙を破る。それに、総司は振り返ることなく答えた。

「姉上のところへ……。少し考える時間をください」

総司には、それだけ言うのがやっとであった。誰かが止める暇も与えず、総司は木製の引き戸を力任せに閉めた。そして総司を追って近藤が戸をあけた時、そこには既に総司の姿は消え去っていた。それは、ほんの数秒の出来事であった。

稲刈りが終わり閑散とした多摩の田舎道を走りぬけていく総司の姿が目撃されたのは、それから数刻後の日暮れ時のことである。

「ただいま、奈都さん」

総司が馴染んだ家の勝手口から顔を覗かせると、米を研いでいる齡二十五前後の女性の姿があった。彼女の家は、本来なら道場から半刻くらいのところに位置している。だが、総司が昼過ぎに道場を飛び出したことなど知らない彼女は、何も知らず、弟の声に手を止めた。

「あら、お帰りなさい。でも、総ちゃん、此处では姉上って呼びなさいっていつも言ってるでしょ」

だが視界に捉えた総司の姿に、その穏やかな表情も一瞬にして変わる。

総司が身につけていたのは薄汚れた浅葱色の羽織。その羽織は現在ではない、未来のものだ。

「蒼矢、あなた……」

思わず真名を呼ぶほど動揺し青褪めた奈都を見て、総司は居心地悪そうに頭を掻く。

「姉上には、やっぱり何でも御見通しだね」

「伊達に二百年生きていないわ。でも、仕方のない子、また、あの時代に行ってきたのね」

全てを察した奈都の呟きに総司の肩がびくんと震える。それを見かねて、奈都は総司を抱き寄せた。

「何度行っても同じ。私達は時代を変えることはできない。それが、時の旅人の掟なのよ」

そう言って奈都は、総司の肩を抱く腕に力を込める。総司はそれを甘んじて受け入れた。

けれど総司は、悲しみを押し殺したような声でただ一言、「それでも、僕はもう大切な人を失いたくはない」と言う。過去を思い出して、総司はその思いを言葉にせずには居られなかった。

その言葉は総司が過去に失ったものの大きさと同時に、新たに手に入れた世界がどれだけ大切であるかも現していた。総司は、新たな世界を与えた近藤との出会いを思い出しながら、姉の胸の中でそっと目を閉じた。瞼の裏には、今でも近藤と出会った日のことが焼きついていく。

嘉永5年。

それが蒼矢が沖田総司の名を得て、近藤と出会った年だった。

旅立ち【2】

「今日からここがあんさんの家や」

蒼矢は初めての時空旅行に、いまだくらくらする頭を上げる。すると自分が住んでいた屋敷とは比べ物にならないほど小さな家がそこにあった。大広間にすっぽりと収まりそうな粗末な家だ。蒼矢はその粗末な家が自分の住居となることに不満はなかったが、新しい生活に対する不安から、穏やかとは言い難い表情で遥華の顔を見上げる。

遥華はにっこりと笑ってみせると、その不安などお構い無しに戸口を叩いた。

きつちり三度乾いた木の音を響かせると、中からそつと戸が開かれる。中から姿を現したのは、二十代半ばほどの女性だった。粗末な家に似つかわしくないほど優雅な仕草をする女性だ。

「いらつしゃい、遥華さん、お久しぶりですね」

その女性が軽く頭を下げると、結い上げた髪に挿していた簪がシヤランツと音をたてた。漆塗りで細やかな細工のなされたその簪。それは町人がする物にしては凝りすぎている代物だったが、その女性の纏う雰囲気がそうさせるのか不思議と浮いてはいない。

「久しぶりやな、奈都^{なつ}。この時代の暮らしには慣れたんか？」

蒼矢が女の雰囲気圧倒されていると、隣で遥華が口を開いた。

「ええ、大分。それで、可愛いお連れが一緒だけれど、この子が例の子かしら？」

奈都と呼ばれた女性は、にっこりと蒼矢に笑い掛ける。その笑顔が在りし日の母の顔に重なって、蒼矢はなんとも言えない気持ちになった。その気持ちが顔に出ていたのだろうか。奈都は「ごめんなさい」と呟いてすぐにその笑顔収める。それが申し訳なく思われて、蒼矢は無理やりにも気持ちを浮上させようと努力した。

「初めまして。お世話になります、蒼矢と申します」

「こちらこそ、初めまして。私は、あなたと一緒に暮らすことになるみつよ。」

それに、彼女も応えるように自己紹介を返してくれたが、それは蒼矢に新たな事実を突き付けた。

「え、でも、遥華は奈都って……」

「奈都が私の本名で、みつはこの時代での名なのよ。時の旅人は、時代に合わせて名を使い分けるものの」

「じゃあ、僕も新しい名を持つべきなのかな……」

蒼矢は、母が名付けてくれたこの名が好きだった。その名まで奪われなくてはならないのか。困惑と疑念が入り混じった目で、確認するように遥華を見る。

「せやな、新たな時代に馴染むためにはそれが一番ええかもしれへんな」

「でも、僕は今のままがいい」

「そうは言ってもなあ。蒼矢なんて名いつまでも、使こつたら、あんさんはいつまでも、過去を引き摺ることになるんやで」

それでも蒼矢は、遥華の言葉に首を縦には振らなかった。それを見兼ねた奈都が膝を折り、蒼矢と向かい合う。だが、蒼矢はふいつとそっぽを向いた。だが、

「あなたがその名を大切にする理由はわかるわ」

と語り掛けた奈都の言葉に、その顔を再び奈都に向ける。

「本当に？」

「ええ、それは大切な思い出なんだもの。だけどね、それは、大切にしまっておきましょう」

「どうして？」

「時の中で本当の自分を見失ってしまわないようにするためよ。いいわね？」

優しく語りかける奈都の言葉から、自分からこの名を奪うわけではないと察して、蒼矢はこくりと頷いた。

「さて、それじゃあ、どんな名前がいいかしら？」

「せやなあ、総てを司る者と書いて総司はどうや」

「総司？」

「まあ、素敵な名前ね」

奈都の一声に、蒼矢はその名前が気に入った。

「総司。総司か……、うん、それにする」

そうして、少し変わった自己紹介を終えたて、蒼矢は奈都に促されるまま家に上がった。そして聞かされたのは色々な話であった。その主たるはこの時代のこと。ここはそう遠くない未来、江戸時代と呼ばれる場所らしい。目立った戦もなく、徳川という将軍が頂点に立ち武士たちをまとめているのだと聞いて、蒼矢は大層驚いた。それだけ多くの武士達をまとめ上げることは、蒼矢の時代では考えられないことだったからだ。

そうして、奈都は蒼矢の質問に答え、何でも教えてくれた。そして、二人が気兼ねなく話ができるようになってきたのを見て取って、遥華が席を立つ。

「わいはそろそろおいとまするは」

遥華が帰ってしまうことに心細さを感じた総司は、遥華の着物の裾を掴もうとした。だが、遥華はそれをすんなりとかわして総司を見詰める。

「元気でがんばりや、総司」

そうだ、その名を呼ばれた時から自分はこの時代の住民なのだと、蒼矢は姿勢を正す。

それを見て、遥華は安心したように微笑んだ。そして総司の気持ち揺るがないうちに、時の流れの中に姿を消した。後に残された総司は暫くの間、遥華が立っていた場所を見詰め立ち尽くしていたが、ぽんつと優しく肩に添えられたぬくもりに振り返ると、奈都がいる。

「今日はもう遅いし、夕食をとって休みなさい」

「でも、今日はいろいろあり過ぎて、眠れそうにありません」

「そう、では今日は一緒にねましようね。でも、いつまでも過去の

ことばかりに囚われていては駄目よ」

「はい……」

「いい子ね。明日は江戸を案内するから、しっかり休むのよ」
そう言っ、奈都は夕食の支度に立ち上がった。

旅立ち【3】

その翌日――。

総司は晴れ渡った空の下、昨夜の言葉通りに連れ出された多摩のあぜ道をゆつくりと歩いていた。昨日からのことが、まるで夢か幻であつたかのように穏やかな時間が流れている。

「私がこの時代に来てから出会った人たちはいい人たちばかりだったから、総ちゃんもすぐにこの時代が好きになると思うわよ」

そう言つて前を歩いていたみつが振り返る。初めのうちは、二人で手を繋ぎ並んで歩いていたのだが、総司が恥ずかしさから俯き加減になるのを見て、みつがこれでは案内をする意味がないと気を遣つたのだ。

空を飛ぶトンビの影を目で追つていた総司は、突然話を振られて驚きいた。けれども、みつの気遣いがうれしくて、顔には昨日は浮かべなかつたような穏やかな表情を浮かべて、再びみつの隣に並ぶ。「みつさんが言うならそうなんだろうね」

「総ちゃん、そんな他人行儀な物言ひは止めて、みつ姉と呼んで頂戴」

「え、でも……」

「あら、この時代では私達は姉弟でしょ？」

「はい、では、姉上と呼ばせていただきます」

「よろしい」

満足気に笑うみつにつられ、総司の顔にも自然と笑顔が浮かぶ。それを見て、みつは、

「やっと笑ってくれたわね」

と更に笑みを深くした。総司に軽くなつたみつの足取りに、それにあわせるように総司は少し歩調を速める。と、その時、総司の耳に聞き覚えのある音が届いた。

それは、乾いた竹がぶつかるような、力強く、それでいてどこま

でもしなやかな音だった。

（これは竹刀のぶつかる音だ）

音につられて総司は足を止めた。

「あら、どこかの道場の出稽古かしら」

みつも音に気付いて、眩きを漏らす。だが、その眩きを耳にするか、しないかのうちに、総司は音のする屋敷へと駆け出した。

領主を父に持つ総司は、幼い頃から武芸の稽古を付けられてきた。そんな総司にとって、剣は唯一父との繋がりを今も示してくれるものであった。それは今もそれは変わらない。だから総司は耳に馴染む竹刀の音に居てもたっても居られなかった。

音のした屋敷の庭先に許しもなく駆け込んだ総司が見たのは、竹刀を構えた男達の間を縫う様に回り、激を飛ばす男の背中だった。

「姿勢を正せ！ 引け腰になるな！」

（父の背中に似ている）

その背中が目に入った瞬間浮かんだ感想がそれだった。大きな背中と逞しい腕。それは、父を連想させるには十分すぎるほどの要素を帯びていた。

「総ちゃん！」

ただ立ち尽くすことしかできなかった総司の肩にぽんと置かれた重み。同時に掛かった声に、総司はびくんと身を震わせる。

その声に指導していた男も二人の存在に気づいた。指導の手を休め、二人に近付いてくる。男はみつに対して会釈をした後、屈んで総司の目線に合わせた。

「稽古の音を聞きつけてやって来たとはな。坊主、剣道に興味があるのか？」

総司は無言でこくりと頷く。

「そうか、そうか、そう言ってくれるとうれしい限りだ。好きなだけ見学していつてくれ」

男は豪快に笑い、総司の頭をがしがしと撫でた。総司はしばらくされるがままになっていたが、ようやく自分の頭からその手が離れ

ると、自分の手とその手を見比べた。

男の手はとても大きい。

（こんな小さな手じゃ何も守れない。あんな大きな手があれば、守りたいものを守り抜けるのかな……）

総司は一日中、その竹刀の音を聞いていたのだった。

丸一日稽古の見学に充てた帰路のこと。蒼矢と奈都は、薄暗くなり始めた頃あぜ道を二人並んで歩んでいた。その道すがら落ち着く間もなく総司がその思いを口にする。

「僕、剣を習いたい」

隣を歩くみつが目を見開き、しかし聡い彼女は、総司の気持ちを正確に汲み取った。否とは言わず、ただその理由を問いたのだ。

「どうして剣を習いたいのか？」

「僕は何かを守る力が欲しいんだ」

「何かを守る力？」

奈都自身失ったものは多く、そして失う度、自分に力があればと思うことは多い。幼い総司がそれを理解していることが、奈都にはなんだか悲しかった。しかし奈都にはそれを止める理由はない。

幼い総司が守るための力を得ることは、同時に自らの身を守る手段を得ることに繋がるからだ。

みつは迷うことなくそれを了承した。

そして再び二人が、試衛館と古ぼけた看板の掛かった道場の前に立ったのは、それから数日後のことだ。

「行きましようか、総ちゃん」

「うん」

ごくりと唾を飲み込んで、総司は道場の敷居に足を掛ける。

進むにつれて大きくなるのは竹刀の音だった。その音が近づくにつれ、総司の表情が強張っていく。けれど、その音と共に聞きなれた声が降ってきた瞬間、今までの表情が嘘のように総司の表情は和らいだ。

「あなた方が、新しい入門希望者だったとは」

後方からの声に振り返れば、先日の出稽古出会った青年の姿がある。驚きと喜びに総司はみつを見やった。みつは悪戯が成功したとばかりに苦笑を浮かべる。

「先日の家に伺って、どこの道場の方かお聞きしたのよ。ほら、総ちゃんご挨拶は？」

みつに促されるまま、総司は慌てて頭を下げた。

「今日から入門させていただきます、沖田総司です。よろしく願います！」

「俺は近藤勇。こんなボ口道場だけど、こちらこそよろしくな」

そう言って青年は、大きな手を差し出す。

手を重ねると、大きくて分厚い手はとても温かだった。そのぬくもりに総司は自然と笑顔となった。

だが、この時はまだ知りえなかったのだ。

この先に待ち受ける歴史を――。

旅立ち【4】

「——総司？　おい、総司、大丈夫か？」

（ああ、あの頃の夢か……）

うつすらと開けた目で、総司は揺れる黒い人影を見詰めた。時間をおくと、ぼやけていた視界がだんだんとはつきりしてくる。少し長めの前髪が顔に掛かって視界を塞いでいたが、それは見知った相手だった。黒い衣に身を包む、鼻筋の通った二十歳前後の男性。それを認めた瞬間、総司は思わずその彼に抱きついた。

「——！」

抱きつかれた相手は一瞬目を丸くしたが、手馴れた様子で総司の背を擦る。

「どうしたんだ、総司」

「昔の夢を見たんだ、シゲ君」

黒衣の男しげのり茂則は、言いながら力を込める総司の手を見て息を吐いたが、黙って総司の言葉を待っている。

「近藤先生は、父と母を失って後、やっと得た光なんだ。だから、父や母のように僕の無力で失うのが怖い」

「お前の両親が死んだのはお前の責任ではないだろう？」

総司は茂則の言葉に、首を横に振った。

「僕の責任だよ。僕が無力だったからだ」

成則にも、総司のように自分を責めずにはいられない時があった。だから、総司の気持ちはよく分かっている。しかし、このままでは何も得られないのだということも理解していた。

「後悔ばかりしていてもどうにもならないぞ」

「わかってるよ、わかってる。でも……」

「お前は新しく守りたいものがあるのだろう？」

成則は、弱気になって俯いている総司の顔を上げさせる。

総司は近藤をはじめ、試衛館の面々を思い浮かべた。

「お前は何かあっても彼らを守りたいのだと俺に言ったな。だったら、今更何を迷う必要がある」

茂則の言葉に、ぶわっ、と総司の目から涙が溢れる。

「そうだね。そうだったんだよ。僕は誓ったんだ」

総司は涙を懸命に拭くと、気合を入れるように頬を叩いた。総司の瞳には再び強い光が宿っている。それを見た成則は、安堵の表情を浮かべた。

「ありがとう、シゲ君。元気出てきたよ」

総司は現金なもので、成則に礼を言いい、傍らに寝かせてあった刀を手に立ち上がる。

「いつまでも、姉上の家に逃げ込んでいる訳にはいかないよね」

「奈都さんももらしていたぞ。家に帰ってきてくれるのはうれしいが。お前は落ち込んでいる時ばかり帰ってくるから、見ているこちらが辛いとな……」

同じように立ち上がった成則が向けた先には、障子の向こう側で揺れる影がある。

「ごめんなさい、立ち聞きするつもりはなかったのだけど……」

控えめに開けられた障子の隙間からみつが顔を覗かせた。

「うんうん、姉上も心配掛けてごめんなさい」

総司は奈都にも頭を下げた。そして総司は本当の姉でないにも関わらず、心配してくれた彼女の優しさに顔を綻ばせた。それを見て安心したようにみつも笑顔になる。

「朝餉の準備が出来ているわよ。昨日は夕食も食べずに部屋に籠っちやっただから、ちゃんと食べなさいね」

「はい、姉上」

返事を返して、総司は成則の手を引いた。

「ほら、シゲ君も行こう！」

「厳禁な奴め！ 言っておくが、今度から実家に戻る時は、事前に伝えてくれ。昨日道場に行ったら、居なくてびっくりしたんだぞ」

「時の郵便屋さんも大変だね」

（でも、もう大丈夫）

これから動き出す歴史の波の中では悩む暇などないに等しいだろう。そしてなにより、守り通すと決めたのだから。

始動【1】

文久三年如月。

それぞれの思惑を胸に、浪士組は上洛する將軍警護の名目の下、京入りを果たす。

そして提出された建白書に対して、朝廷から攘夷実行の達しが下される。それは尊王攘夷を志す浪士組の存在が朝廷に認められた証拠でもあった。そして浪士組を京まで率いてきた清河八郎は、新徳寺に浪士全員を集めこう語る。

「浪士組の尊王攘夷という存在意義が朝廷に認められた。よって、戦争がいつ始まるかも知れない江戸へ戻り、それに備える旨を朝廷に願うでしょうかと考えている」

だが、その言葉に、芹沢鴨一派、近藤勇一派は反対を示した。確かにこのまま江戸に帰っても尊王攘夷にはかわりはない。けれど、清河の幕府をないがしろにするやり方に納得がいかなかったからだ。かくして、芹沢鴨一派、近藤勇一派は京に残留することを決意する。そして、攘夷のために上洛する將軍家茂の警護にあたるという名目で、会津藩松平肥後守御預りとなった。これにより、晴れて、壬生浪士組の設立される。

けれど、それを機に彼らの苦難は始まっていくのである。

目に余る芹沢の横暴。日を置かぬうちに壬生浪士組の評判は落ちていき、そして壬生浪士組を改め新撰組という隊名を下された年、彼らはことを起こした。

それは、草木も眠る丑三つ時にことだった。人の気配も草木の気配すらない夜更けに、総司は星の明かりだけを頼りに、打ち合わせ通り芹沢の部屋に忍び込んだ。すると、驚いたことに部屋の主は傍らで寝息をたてる女性の髪を撫でながら、総司の姿をその目に捉

えていた。どうやら、総司の来訪を予期していたらしい。彼の口からは、驚きの言葉ではなく、呆れの色が窺える。

「やっと来たのか。遅かったな」

彼は、面白がるようなクツクツと笑った。総司は予測していなかった事態に困惑したが、自分の使命を思い出して心を落ち着かせる。相手のペースに乗せられては相手の思うつばだ。

「芹沢さん、あなたは自分勝手が過ぎました」

「だからこれ以上自分たちに害をなす前に殺ろうってか？ 俺に言わせりゃ、お前らの大将のほうがよく勝手だぜ」

「あなたは僕が近藤先生の命令でここにいて思っているようですけど、僕は僕の意味でここにいます」

啖呵を切ってみせた総司に、尚も芹沢はクツクツと笑う。

「そうか——自分の意思、ねえ。お前に、殺る覚悟が本当にあるのかどうか」

芹沢はそう言って、衣擦れの音と共に立ち上がった。そして、総司が構えている刀の切っ先まで自らの足で進む。そして、

「本当にお前に、その覚悟があるというなら、お前に殺られるのも悪くないかもしてねえな」

と言って、芹沢は心の臓を示してみせた。そのいつもと変わらぬ芹沢の口調に、総司の中で迷いが生まれる。その心の揺れに呼応して、構える刀の切っ先がふるふると揺れた。

それを見て芹沢は、呆れたように息を吐く。

「しょうがない奴だなあ」

そう言って芹沢は、素手で刃を掴み、自らの心臓の正面で固定した。

「ほら、よ……」

その所業に、総司はわけがわからず、目を見開いた。

「どうして？」

「はっ、何だよ。お前の使命は俺を殺すことだろ？ 今更、怖じ気付いたか、沖田総司」

「そ、そんなことは……」

「だったら、早くやれ」

そう言つて、芹沢は、今まで浮かべていたものとはまるで違う鋭い眼光で総司を睨み付ける。息が詰まる——総司はそう思った。それは一種の恐怖だ。その思いを振り払うように大きく深呼吸をして、ゆっくりと目をつぶる。そのまま——。そう後は、腕に少し力を込めればいいだけだ。

ただ、それだけのことはずなのだ。

「ぐぬうううう——」

呻き声ははたしてどちらがあげたものなのか。それは総司にはわからなかった。けれど、指の先、感覚の鋭くなったそこから伝わるのは、肉を裂く感触と血の温かさ。

それらが全てが真実だと物語っている。「そうだ、それでいい」と、総司は最後に、芹沢の呟きを耳にしたような気がした。

何かを守るには、犠牲はつきものだ。そう自分に言い聞かせながら、総司は頬を温かい涙が伝ものっていくのを感じる。

その夜、総司は声をあげることなく、ただ、ただ泣いた。

その夜の痛みを、総司はきつと忘れないだろう。

その証拠に、それから数日間、総司は赤い目をして過ごした。

人の死は、総司にとって身近であったが、決して簡単に受け入れられるものではなかったのである。しかし、だからといって、これから総司が進もうとする道は、死と切り離せないものであることも理解していた。それを、芹沢が痛いほど教えてくれたのである。そして、ようやく総司の泣き腫らした目が落ち着きを取り戻した頃、浪士組は本当の意味で始動の時を迎える。

それは、数日ぶりに、近藤派が一堂に会する朝食の席でのことであつた。沈黙のうちに始まつた朝食の席で、最初に口を開いたのは土方である。

「芹沢達の問題も片付いたし、そろそろ本格的に活動を始めるか……」

先日、肅清のもと芹沢一派を惨殺してからあまり時間が経っていないため、山南などは口に運び掛けていた煮物を取りこぼすといった過剰ともいえる反応を見せている。だが、件の肅清はここにいる全員に暗黙の了解となっている。大家達がいらない以上、土方に氣にする必要などないのだ。土方は、卓の上に置かれた自分の煮物の皿へと箸をのばして、皆の意見を待っている。

「歳、いくらなんでも、今は芹沢さん達の喪に服するべきじゃないのか？」

山南の思いを代弁するかのようにな藤が口を開くと、土方は、口の中の里芋をぐくりと飲み込んだ。そして、近藤を見据える。

「何言ってるんだ近藤さん、こんな時だからこそ軌道に乗せなきゃなんねえんだよ。それに、芹沢のせいで落ちた評判も取り戻さなきゃならねえ」

「要するに、早めに汚名返上、名誉挽回すべきだと言いたいんだな」

「ああ、そう取つてもらつて構わねえよ」

土方の返答に近藤は手を顎に添え、考え込むような素振りをみせた。しかし結論が思いのほか早く出たのか手をパツと叩いた。その音を聞き、朝食の席に付いていたものは一様に食事をする手を止める。それを確認して、近藤居並ぶ面々を順に見渡した。

「歳の意見に反対の者は？」

誰も異論を唱えない。それで納得がいったのか、近藤は土方の案に了承を示した。

「で、具体的には何をするんだ？」

「それはだな」

皆、聞き漏らすまいと土方に顔を寄せる。もちろん、総司もその中に交じっていた。

始動【2】

それから更に数日後、壬生の屯所内では藤堂や井上といった面々が慌しく右往左往していた。それは、あの日土方が提案した「新隊士募集」の案件に起因している。土方は、今のままでは満足な活動もできないと、組織を大きくする道を選んだのだ。そして、それは同時に準備のために多くの仕事を生んだ。屯所内を駆け回る藤堂らは、新隊士募集の為の書類整理に追われているのである。その様子を目で追う総司は、体を動かすことには長けているが、こういった事務面にはとことん向いていない。身の置き場に困った末に、総司は、屯所の外に足を向けた。すると、丁度屯所を出たところで、見知った顔が総司の目に入る。

「おや、沖田君良い所に来てくれましたね」

屯所の門の前で、山南が受付の作業を進めていた。総司は自分の間の悪さを呪ったが、見つかってしまつては、手伝わないわけにもいかない。

手招きされるまま、山南の傍に近付いていく。

「どうしたんですか、山南さん」

「それが、私は他の仕事もあるのに、人手が足りず受付を離れられずに困っていたんです」

やはり気付かない振りをすればよかった、と総司は思ったが、それでは後が怖いのも事実だ。総司は、渋々、机の上に置かれた書類を手を取った。

「では、お手伝いしましょうか？」

「沖田君は察しがよくて助かります。受付を頼みますね」

笑顔で言う山南に、総司は深く溜め息を吐き、山南が空けた椅子に腰掛けた。

「この帳面に名前を書いてもらうだけで構いませんからね」

硯と筆を示して山南は次の仕事へと慌ただしく去っていく。総司

は、それを見送って、うーんと大きく伸びをした。いつ来るとも知れない入隊希望者を待つ退屈さから、睡魔は時を有さず、総司に迫ってくる。だが伸びだけで眠気を紛らわすことにも限度があり、総司は眠気に誘われるまま舟をこぎ始めた。

だが、乾いた音と共に自らの頭を襲った衝撃に、睡魔は一瞬にして遠退いて行く。

「痛いなあ、もう！」

何分ほど寝ていただろうか。その衝撃に飛び起きた総司の目に最初に入ってきたのは、灰色の着流しと茶色の帯だった。そのまま総司が視線を上に向けると、呆れた表情を浮かべた友の姿がある。

「ああ、シゲ君、おはよう……」

総司は叩き起こした人物が成則だとわかると、眠そうに目を擦りながら口を開いた。

「まったく、なんで俺が来るときに限って、お前はそう寝てばかりいるんだ」

成則もその様子に呆れ果てて愚痴をもらす。総司は、居心地悪そうに苦笑を浮かべた。

「あはは、面目ない。ところで、シゲ君はどうしてここに？」

茂則が総司を訪ねる理由など一つしかないのだが、その言葉には居眠りから話を逸らす算段も入っている。そして、どうやら話を逸らすのに成功したらしい。成則は眉を寄せたが、懷に手をやると一通の文を取り出し総司に差し出した。

「奈都からだ」

それを受け取った総司はその場に目を輝かせると、破れんばかりの勢いで文を開いた。

「奈都は何と？」

「うーん、今度京に遊びに来るって」

「そうか」

「って、シゲ君、何してるのさ」

開いたときとは比べ物にならないほど綺麗に文を閉じて、総司が

目を上げると、成則が目の前に置かれた帳面に何やら書き込んでいるところだった。よく見れば、それは名前であることが見て取れる。しかし、それは総司が馴染んだ名ではなく、「山崎進」という、見ず知らずの者の名だった。それに気付いた総司は、問い質すように茂則を睨みつけた。

「どういうこと？」

「俺が入隊することに何か不都合でもあるのか？」

「え？」

返ってきた返答に、総司は思わず間抜けな声を上げた。この友人にどういう意図があるのか見えてこなかったからだ。

「でも、シゲ君って成則じゃなかったっけ？」

「それは本名、山崎進はこの時代での名だ」

お前の名もまたこの時代での偽名だろ、と続けて問われ、総司は罰が悪そうに笑う。だが、総司が真に聞きたいのはそんなことではない。

「何で今更入隊しようなんて気になったのさ」

その疑問を素直に口にすれば、

「ここに来る前に料理屋に立ち寄ったんだ。そこで、お前、俺のことを言いたい放題言っていたらう？ もっと早くに気付くべきだった。お前を野放しにしておくべきじゃなかったとな」

と眉間の皺をさらに深くして、茂則が呟いた。

それに対して、総司は彼にとつての自分の印象を垣間見たよう気がした。だが、料理屋で成則のことを散々漏らしていたことは事実だったので、総司には何も言い返せない。そして、止める間もなく成則は山南に連れられ屯所の中へと消えていったのだった。

千年桜【1】

文久四年。

総司達が京に来て、二度目の春を迎えようとしていた。一年目の春は、浪士組が結成されたばかりで、春の訪れを楽しむ余裕はなかったが、今年こそは花見に行くのだとお祭り好きの原田を筆頭に隊士達は色めき立っている。そんな屯所内の様子を楽しそうに見つめていた総司は、壁に背を預け一人佇む進の姿に気付き、そちらに足を向けた。

「監察方の進君が屯所にいるなんて珍しいね」

進と同じように壁に背を預け総司が口を開く。進は、向けられた総司の笑顔を鬱陶しそう見つめ、眉間に皺を寄せた。

「先日から頼まれていた件の報告に来たのだが、帰り際に、花見の準備を手伝えと呼び止められてこの様だ」

肩を竦めて見せた進に総司は苦笑を浮かべ、騒ぎ立てている原田の方へ目をやる

「ココの皆はお祭り好きなんだよ。進君は、嫌い？」

「いや、皆でこうやって騒ぐのは嫌いじゃない、ただ……」

「ただ？」

総司が再び進の方に顔を向けると、その瞳に射抜かれたのが心地悪かったのか、進は珍しく顔を背けた。そして、進はやっと聞きとれるほどの小さな声で、呟きを漏らした。

「桜の花は好きじゃないんだ」

何だか今にも消えてしまいそうだ。弱弱しい進の姿に総司はそう思った。総司は、どうにか掛ける言葉を探した。けれど、その言葉を口にする前に、目の前に現れた人物を見て取ってその言葉は飲み込まざるを得なかった。

「沖田君と山崎君なんて珍しい組み合わせですね」

いつもの温和な笑顔を顔に貼り付けて、総司の前に現れたのは山

南だった。その声で壁際にいた二人の存在に気付いて、その場にいる者たちの視線がさつと二人に向けられる。

「何言ってるんだ、山南、コイツ等は案外仲がいいんだぜ」

花見の準備に託けて、もう既に酒を飲んでいる原田がケタケタと笑う。そんな原田は無視して山南は

「そうなんですか？」と二人に顔を向けた。

「ええ、まあ」

進は心底仕方なさそうに答えた。能天気な総司の同類だとは思われないが、嘘も吐けない生真面目な性格なのだ。

「ところで、山南さん、いい花見の場所は見付かったのかよ」

そこへちようど街に出掛けていた土方が帰ってきたようで山南に声を掛ける。

「実は、まだなんですよ」

形だけ申し訳なさそうに返答するが、山南の表情はどこか楽しげだ。

「ただ、興味深い話を耳にしましたが……」

「興味深い話？」

皆が一斉に山南に視線を向ける。

「ええ、京から少し離れた山に在るといふ不思議な桜の話ですよ」
そう言いながら山南は、隊士達の輪の中心に進み出て腰を下ろした。隊士達はその周りに円を描くように集まってくる。そんな中ふと進に目をやった総司は、山南の話を聞いた瞬間進の顔色がさつと青褪めるのを見逃さなかった。だが、山南はそれに気付いていないらしい。

「これは、私が京（みやこ）に着てからお世話になっている店の店主から聞いた話なのですが」

とゆつくりと物語を紡ぎ始めた。

今からずっと昔、まだこの京に国の中心がおかれていた時代。
この京からそう遠くない山の頂に一本の桜の木がありました。大

そう大きく立派な木なのですが、その桜の木は、春が訪れても花を咲かすことはなかったといえます。そんなある年、都では奇妙な噂が広まっていました。毎夜毎夜、白骨が桜の木のある山に向けて歩いていくということです。気味悪がった都の者達は山に近付こうとはしませんでしたが、中には好奇心から山に向かう者もありました。しかし、意気込んで出掛けて行った者達は皆帰ってくることはなく、噂が噂を呼び、人々は恐怖していました。そしてその噂を耳にした時の帝は、とある名のある陰陽師に事の真相の解明を依頼したのです。

帝からの命を受けた陰陽師は、すぐにその山に向かいました。そして山に着いた陰陽師は、我が目を疑いました。何年も花を咲かせることがなかった桜が咲き誇っていたからです。しかし、咲き誇る桜に驚きはしたものの、動く白骨や物の怪の類の姿はどこにもなく、陰陽師は困り果てた様子で桜に近付きました。と、そこへ、リーンと澄んだ鈴の音が響きます。陰陽師が音のした方に目をやると、白い水干を身に纏った一人の少年が立っていました。

「こんなところでそうしたんだい？」

陰陽師は警戒しつつも、少年に声を掛けました。しかし、少年は返事を返すこともなく、陰陽師が立っている地面を見詰めるだけです。それを訝しく思った陰陽師は、自分の立つ地面を指差して少年に尋ねました。

「ここに何かあるのかい？」

陰陽師が睨んだとおり少年は頷きます。

陰陽師は、少年の示す通りに地に手をついて土を手にとってみました。ところが、異常は見当たりません。陰陽師は、もう一度尋ねようと少年に目を向けようとしていました。と、その時です。陰陽師の目に、何か得体の知れないものの一端が土の中から姿を現しているのが留まりました。陰陽師は慌ててそれに駆け寄り、その正体を確かめようと土を掘り起こしに掛かります。そして、ついに姿を現したものに、陰陽師は目を丸くしました。

桜の下には――

「死体が埋まっていたのです」

山南の話に聞き入っていた隊士達は驚いて声のした方向に顔を向けた。総司もまた同じように驚いた顔を隣に向けている。声を上げたのは総司の隣に佇む進だった。

「よく結末が分かりましたね、山崎君」

山南の言葉にはつと我に返った進は、自分に皆の視線が集まっているのに気付き、居心地悪そうに身動きみじろをした。進の顔色は青いまま、さらに瞳にはどこか哀愁を帯びている。それが相成つて総司には痛ましく思えた。それと同時に、この話は進の過去に関係があるのだと直感がそう告げている。

「進君……」

総司は心配そうに名を呼んだが、進は心配ないと視線をよこし一歩前に進み出た。後ろに隠すように回された腕が震えているのを、後方に立つ総司だけは見て取ることができた。

「俺が生まれたのはその話の舞台と言われる地方で、昔からよく聞かされていた伝承だったんですよ」

「へえ、そうでしたか。じゃあ、もしかしてその死体の正体をご存知かな？」

びくんと身を振るわせた後、進は首を横に振った。それに気づかない山南ではなかったが、彼は聡い男だったので何事も問い詰めようとはしなかった。

「それは残念。私もこの先の話は聞けずじまいで、気になっていたのですが……」

「すみません」

「いいですよ。思い出したら教えて下さいね。それにしても、山崎君顔色が悪いですよ。少し休んだ方が良くないのかないのかい？」

「あ、じゃあ僕が医療班のところまで連れて行きます」

総司は山南の言葉に慌てて名乗りをあげ、進の手を掴んだ。進の

手はとても冷たくて、氷のようだ。総司は、心配そうに進の顔を覗き込んだ。

「進君、大丈夫？」

黙って頷く進を連れて、総司はその場を後にする。こんな進の姿を見るのは総司とて初めてだった。そして、二人は屯所の廊下で人氣がないことを確認すると足を止めた。顔色はまだ悪いままだったが、

「ここでもいい」

と進はすっかりした声で答えた。それに多少安心したように息を吐いて、総司は先ほどから気になっていたこと口にする。

「進君……いや、シゲ君。君が桜を嫌いなのは、さっきの話に関係があるんじゃないの？」

進は総司の問い掛けに総司を非難するように睨み付けたが、それで怯むような総司でもない。総司は、その視線を真正面から受け止めた。そうして二人は、しばらく睨み合っていたが、先に顔を背けたのは進の方だった。

「場所を移そう」

そう言っただがぱちんと指を鳴らす。するといつの間にか辺りの様子は一変していて、総司は目を見開いた。そこは辺りを木々に囲まれた開けた場所だった。空が近いことから、どこかの山の頂なのだろう。その頂の中央には大の大人五人が腕を伸ばしやうと幹を囲めるくらいの桜の木が埋まっている。

総司は様子を窺うように恐る恐る進に顔を向けた。

「ここは？」

「あの話の舞台となった場所——遙かなる時の華が咲く場所だ」

「遙かなる時の華？」

「これがそうだ」

総司の疑問に、シゲはすつと目の前に立つ一本の桜に歩み寄り、どこか悲しそうに苔の生す幹に手を触れた。

「昔話をしよう。この京がまだ平安と呼ばれていた時代の話……」

千年桜【2】

「時の流れとは早いものだな」

太い木の幹に身を寄り添わせ、銀色の美しい長髪を風に流しながら、この桜の守人である静は佇んでいた。数百年に一度、記憶の解放と共にしか花を咲かせない千年桜は、蕾が色付き開花の時が近付いている。そんな桜を慈しむように身を寄せていた彼女は、自身を呼ぶ声に顔をあげた。

「おばあさま！」

「成則」

白い水干を着た少年が白い袖を揺らしながら走ってくる。その愛らしい姿に、静は嬉しそうに目を細めた。姿こそ二十代前半ともいえる静だが、彼女は本来ゆうに百年以上は生きている。少年は彼女の愛する孫であつた。そして彼女は、体に走った衝撃に孫が抱きついてきたのだと気付く。静はすつと手を伸ばし、自分の腰の辺りにある成則の頭を撫でてやった。

「よく来たね、成則」

成則は静の手の温もりに、気持ち良さそうに顔をほころばせる。

「父様がいずれお前が守人になるのだから、開花の儀式をしっかりと教わっておきなさいって」

「そうかい、勉強熱心なことはいいいことだよ。けれど、今回はちょっと厄介なんだ」

「厄介って？」

「お前は、千年桜が永遠を生きることを捨てた時の旅人の記憶を糧として花を咲かせることを知っているだろう？」

無邪気に聞き返す成則に苦笑を浮かべ、静は答えた。静の言葉に、勿論だと言わんばかりに成則が頷く。それを確認して静かは言葉を続けた。

「先日、一人の旅人が記憶を差し出してね」

そこで言葉を一端区切り、静は悲しそうに桜の木を見つめた。旅人が記憶を差し出したということは、この世界に確かにいたという存在自体を抹消されることに等しいからだ。彼の旅人がどんな思いで記憶を差し出したかは知らないが、彼の愛した者達、また彼を愛した者達の記憶から彼の旅人の記憶が消えてしまったのだと思うと居た堪れなかった。

だが静は、自分の衣の袖を引っ張る成則の存在に話が途中であつたことを思い出す。そして、その思いに蓋をした。

「それがどうして厄介なの？」

「今回はその影響でいつも以上に彷徨い人の数が多いんだよ。それに加えて、桜の開花時期も早まってしまったからね」

「彷徨い人！」

彷徨い人という単語に、成則の顔が瞬時にして強張る。死して尚、永遠を求め時を彷徨う者。茂則の脳裏を、父の言葉が甦つたのだ。彷徨い人は稀代の大陰陽師といわれる父をもつてさえしても払うことが難しいと言わしめた強敵だった。

「大丈夫なの、おばあさま」

成則は静の衣を掴む手に力を込め、尋ねた。その手はいつのまにか震えている。それが恐怖からくるものなのか、不安からくるものなのかわからなかったが、成則はなんだが嫌な寒気を感じた。しかし、重ねられた静の手の温もりに、奪われかけた体温が戻ってくる。すると、成則は「あつ」と思い出したかのように懷に手をやった。遠慮がちに成則が懷から取り出したのは、柄と鞘に漆塗りで細工の施された小刀だった。静の記憶が正しければ、その小刀は成則が母から譲り受けて大切にしている品のはずだった。

静は成則の意図が分からず、首を傾げる。

「これ……お守りに……」

そう言つて差し出されてやっと成則の意図を察した静は、成則の優しさに笑顔を浮かべ、ありがとう、とそれを受け取った。

茂則が不思議な男に出会ったのはその岐路のことだった。

「ああ、しもた。何でこんな肝心な時に道に迷うてしもたんやる！」
朱雀大路から二条大路を通り西洞院大路に入ったところで、茂則の目に入ってきたのは、空色と呼ぶに相応しい青い色の宿衣を身に着けた男の姿であつた。

身なりこそどこかの貴族のようだが、成則は今までこれほど鮮やかな青い宿衣など目にしたことがない。その上、供も従えずに立ち往生している男は、女性のように長く伸ばした髪を、烏帽子もかぶらず、後ろ手に結い上げていた。何とも得体のしれない男だ。成則は早々に関わるべきではないと判断を下した。そして、踵を返そうとしたのだが、

「待つてえな、その坊ちゃん」

強い力で腕を引かれそれは遮られた。見れば、先ほどまで道の真ん中にいた男が、目前に立っている。

茂則は慌てて、男の腕を振り払った。その茂則の様子に、申し訳なさそうに肩を落として、男が口を開いた。

「わいとしたこが道に迷うてしもうてな。悪いんやけど、土御門大路の安倍邸にはどう行けばいいんやるか？」

だが、成則は男に返事を返すことが出来なかった。聞いたことない男の喋りに驚いたのではない。男が尋ねた邸宅こそが成則が帰ろうとしていた場所だったからだ。

「家に何の用？」

思わず口からもれた呟きに、茂則は、しまった、と思った。しかし、もう遅い。そのまま茂則は男を家まで案内しなければならなくなつたのである。

千年桜【3】

「それにしても坊ちゃんが安倍の息子だったなんて驚いたわあ」

父もまだ帰っていないのに男を勝手に屋敷に上げていいものかと茂則は迷った。しかし、男には有無を言わさぬ行動力があつた。留守を預かる式神に断りを入れると、男は屋敷に上がりこんで、ちゃっかり夕食に舌鼓を打っている。

成則は母に帰宅した旨を伝えた後、男と共に夕食を摂っていたのだが、羹あつものの椀に手を伸ばしかけた時式神の気配がざわめいたのを感じて手を止めた。隣を見ると件の男も酒の入った杯を手にしながらも、しっかりと玄関に繋がる廊下に目をやっている。その姿に、成則は少し感心した。

「どうやら帰って来た見たいやな」

杯に入った残りの酒をくいっと飲み干して男は言った。すると早速にこちらに向かつてくる足音が聞こえる。そして間を置かず姿を現したのは、白い宿衣を着た茂則の父であつた。その姿を捉えて、男が口を開く。

「久しぶりやな、清明。勝手に邪魔させてもらってるぞ」

すると、男の姿を捉え、いつも眉一つ動かさない冷静な清明が、
「いったい何しに来た、遥華」

と、あからさまに顔を顰めた。

そのいつになく低い声に、やはり連れてくるべきではなかった、と茂則は後悔した。このように怒る父の姿を、久しく目にしていな
い。このままでは、男を連れて来た自分にまで責が及びそうだ。茂則はどう父に申し開きをしたものと逃避を始めている。今すぐにも遥華と呼ばれた男に、何もかも押し付けて、部屋を去ってしま
いたかった。しかし、

「つれへんな、折角、時の流れの外からやってきたのに」

と遥華の言った言葉に、茂則はそれを思い止まった。

「遥華！」

成則の前でその話はするなと言いたげに清明は遥華を嗜めたが、もう遅い。茂則は確かに、その言葉を耳にしていた。そして、時の流れと聞いて、茂則が思い浮かべるのは、祖母の姿だ。茂則が隣に座す客人の男を見やれば、男はその身を寄せ、

「なんや清明、そんなの今更やないか。どうせ次代の守人はこの子なんやろ？」

と、茂則を抱きすくめた。その腕の中で茂則が嗅いだのは微かに桜の香りだった。それは人を惑わす、甘い香りだ。ぼーっとする頭で目だけを動かし、茂則は遥華を見上げる。

「おばあ様のお友達？」

「せや、わいは静と同じ、時の神の配下や。これが証拠」

そう言つて遥華が髪を振ると、今まで黒かった髪が一瞬にして金に変わる。それは、この時代にはない色合いだった。祖母とは正反對の輝きでありながら、それはどこか似てる、と茂則はぼんやりと思う。

いつしか遥華への不信感が消えていた。敬愛する祖母と同じ時の神の配下だという言葉が大きかったかもしれない。そしてまた、自分も時の神の配下となるのだという驕りがあつたのかもしれない。

「成則、お前は部屋に戻っていなさい」と見るに見かねて、清明がたしなめるように腕を引いたが、心地よい思いに慕っていた成則には氣にする必要などありはしなかった。瞼が重くてたまらない。茂則が意識の中で最後に聞いたのは、父の悲しそうな後悔の声だけだった。

次に茂則が目を覚ましたのは、まだ夜更けのことであつた。しかし、ばたばたと忙しく行き交う足音が、何かよくない兆しを知らせていた。茂則は、自分が今どこに居るのか認識するのに暫しの時間を要したが、寝起きの頭で、遥華と共に父の帰りを待っていたの

だと思い出す。どうやらいつの間にか眠ってしまったらしい。自室で寝っていたということは父が式神に運ばせたのだろう。だがそれにしても、こんな時刻に、この騒ぎはどうしたことだろうか。

成則は上着を羽織り塗籠ぬりこめから出ると、妻戸つまどから顔を覗かせた。外はやはり暗闇で、まだ日が昇る時刻ではない。渡殿わたどのを東対あずまついに駆けてゆく式神は手にした紙燭の光を頼りにしている。夜目が利く成則は光源も持たずに式神の後を追った。

そして、東対あずまついにむかうと、明かりの元には父の姿がある。しかし、どうも父の様子はおかしい。父の前には、以前も目にしたことがある宮中からの使者が、膝を折って居住まいを正している。茂則のいる場所からでは話の内容が聞こえないため、茂則は気配を殺し尚も近付いた。すると、ちょうど父の怒気を含んだ声が聞こえてくる。

「宮中に動く白骨が現れただ！」

父は、そう言って手にしていた扇をぴしゃりと閉じた。それに使者はびくりと肩を震わせ、その使者を気の毒に思ったのか、父の隣に立った遥華が代わりに言葉を続ける。

「要約すれば、その怪異の正体をつきとめ、退治しろってことやな」
「はい、その通りです」

震える声で使者が答えると、遥華は父を振り返った。茂則のいる場所から確認できたその表情は、いつになく険しい。

「と、言うことらしいで、清明」

「帝には承知したと伝えてくれ」

使者は二人に畏まったふうに頭を下げると、急ぎ宮中へ帰っていった。それを見送りながら、

「まさか、宮中にまで彷徨い人が現れるとは……」

と父が呟きをもらす。その呟きに茂則の肩が震わせた。彷徨い人は祖母が戦おうとしている相手だったからだ。

「わいも、今回はいつもより彷徨い人は多いとは思うとったが、流石にこれは予想外や」

「ああ」

式神が差し出した烏帽子を受け取り、靴を履く父を目で追えば、すでに表には式神により馬の準備がなされている。

「千年桜の元に向かう。留守は頼んだぞ、遥華！」

「気つけてな」

「無論だ。行ってくる」

言葉と共に式神がいつてらっしゃいませと頭を下げる。父が手綱を握ると馬が嘶いて駆け出した。風のようなたと喻えるにふさわしい速さで、あっという間に蹄の音が遠退いていく。

その一部始終を柱の影から眺めていた成則は、内心の焦りを抑えきれずにいた。父が慌てて千年桜に向かったことから、祖母に危険が迫っていることが予測されたからだ。成則は遥華に気付かれないうちに部屋の戻ると、闇に紛れる色合いの衣装を見繕い、父の後を追う支度を整えた。だが、いざ部屋から出ようとしたところで、

「どこ行く気や、成則」

と、それは遥華に阻まれた。

「言わなくなつてわかつてるだろ！」

焦る気持ちから、茂則の口調は自然と荒くなった。

「そんなこと言われても、わいが清明から留守を預かっている以上あんさんを行かせる訳にはいかん」

「そんなこと知るもんか。僕はおばあさまを助けに行くんだ！」

「行つたところであんさんに何が……つて、痛っ！」

成則の動きを阻もうと肩に置いていた手を噛まれ、遥華は慌ててそれを引っ込めた。その隙について成則が駆け出す。遥華は慌ててもう片方の手で成則の衣の裾を掴もうとしたが、茂則には捕まる気などありはしなかった。風よりも早く、光よりも早く——そう意識した瞬間、茂則が次に目にしたのは、遥華の姿ではなく、見慣れた見慣れた山の裾野と山の頂へと続く石段であった。なぜ自分が一瞬にして目的地に辿りついたのか理解するのに、茂則は暫し時間を要したが、冷静になってみると何のことはない自身の血の覚醒の結果である。儀式のために張られた結界のせいで、山頂に降り立てなか

ったことが忌々しかったが、それでも、茂則は石段には呪が施してあることを知っている。その呪は空間を繋げるものだから、それを発動させれば、そう時間を要せずに頂へと辿り着くことができるだろう。茂則は、石段の両脇に置かれた石灯籠に刻まれた紋を指でなぞった。すると、灯籠の中で光が灯り、等間隔に置かれた灯籠に次々と光が灯っていく。それが山の頂まで、光の列をなしたことを確認して、茂則は石段に足を踏み入れた。すると

、木々に囲まれた狭い石段の続いていたはずの視界が開けて、成則は自身が山頂に至ったのだと認識する。しかし茂則の眼前を覆っているのは、桜の艶やかな薄紅色ではなく、冷やかな白だった。それは、どう見ても人骨である。桜の枝が届く範囲を残して、血の通う肉を持たない彷徨い人達がひしめき立っている。その白の中で懸命に祖母の姿を探した成則は、桜の下で揺れる銀髪に気付いた。

「おばあさま！」

成則は有らんばかりの声で祖母を呼んだ。しかし、その声は彷徨い人たちが顎を打ち鳴らす乾いた音によって掻き消された。一斉に顎を打ち鳴らす姿に、まるで彼らは歓喜しているようだと思成則は思った。

同時にそのことに恐怖も覚える。その恐怖に呼応するように彷徨い人のその無機質な音が、一際大きくなった。

（どうしたことだろうか）

茂則が様子を窺うと、どうやら祖母の様子がおかしい。祖母の手には、きらりと光るものが目にする事ができた。目を凝らしてみようと、それは成則がお守りにと祖母に渡した小刀だった。祖母は、その小刀を自らの胸に向けて構えているのだ。それを認識して、

「おばあさま！」

茂則は再度声をあげた。だがやはり、その声は祖母へと届かないにもかかわらず、成則の耳にはその音が鮮明に届いた。祖母の胸に小刀が刺さる音が――。

（ああああああああああああああああああ）

その音を耳にした瞬間、茂則の喉の奥から、声にならない叫びが沸き起こってきた。白かった視界が赤に染まって、祖母の体がゆっくりと崩れおちていくのが見える。それが地につくのを見届けないうちに、その体を白い軍勢が覆い隠していく。だが彼らの体は、祖母の体に触れた瞬間、砂と化し飛び散った。その現象はまるで波のように辺りに伝わり、あれだけ居た彷徨い人の姿は跡形もなく崩れ落ちていく。後には、涙にくれる成則ともう笑い掛けてくれることがない祖母の亡骸が残されていた。

千年桜【4】

「後から聞いた話では、守人の血は彷徨い人を静める唯一のものなのだそうだ。あのとき祖母は身を挺して彷徨い人を静めることを選んだのさ」

そう言つて、茂則は話を締めくくつた。千年桜の木の幹に体を預け、そこに刻まれた記憶に思いを馳せながら、耳を傾けていた総司は、桜の気を見上げ、

「そう、だからシゲ君にとって桜は悲しい記憶そのものなんだね」と言う。

「でもね——」

言葉が続けながら、総司はゆっくりと視線を茂則に移した。

「シゲ君、僕は近藤さんに出会つて思つたんだよ、悲しい記憶だけが全てじゃないつて。それにシゲ君は僕に言つたよね。後悔ばかりしていても仕方がないつて」

「確かに言つたが、それとこれとは……」

「関係ないことなんかじゃないよ。僕は、シゲ君が僕に対して甘いと同時にとつともなく厳しいことを知っている」

「そんなことは……」

本当にないと言い切れるの？、と自分を見つける総司の目に、茂則は言葉を詰まらせた。総司は、それをいいことに、尚も言葉を続ける。

「シゲ君はさ、僕の傷を癒そうとしているけど、それと同時に自分の傷が癒えることを望んでる。シゲ君が僕に言ってくれた言葉は、自分自身が言つて欲しい言葉なんだよ」

不覚にもその言葉に、癒えたはずの傷が未だ癒えきれていないのだと茂則は気付いた。割り切つたつもりでいて、その実囚われていたのだ。くつと唇を噛んだ茂則に、耐えかねた総司が桜の幹から体を離し、手を伸ばす。

「今だけは僕に言わせて。僕にとって、剣は父と母を思い出す悲しいものだったけれど、今は違う。剣には近藤さん達と過ごした日々の思い出が詰まってる。桜も同じだよ。それが悲しい記憶なら、楽しい記憶で上塗りすればいい」

成則は総司の手を見つめ、それに手を重ねる。

「行こう、お花見へ……」

総司が声を掛けると、成則は「ああ」と頷いた。

月明かりの中、咲き誇る桜。花見の名所と名高い場所であっても、この物騒なご時世は流石に日が沈むと人影はない。

それをいいことに思い思いに衣を着崩して、隊士達が飲み明かす。なかでも原田は服を脱ぎ裸踊りでも始めそうな勢이었다。隊士達が「よっ、待ってました！」と歓声をあげる中、常識人である永倉と山南が慌てて止めに入っている。

こんな夜中に、自分達以外に見咎める者などいないのだから止める必要のないのに、と少し残念に思いながら総司は横に座す進を見た。進は昼間とは比べようもない穏やかな表情を浮かべて、天の川のように夜の中に浮かぶ桜の花を見上げていた。もしかしたら、彼の心は桜の花によってできた天の川を渡り、対岸の祖母のもとに行っているのかもしれない。

「手のひらを硯にやせん春の山」

同じように桜の花を見上げていた土方が歌を詠む。相変わらずセシンスのまるでない歌だったが、総司には今宵はそれを指摘するほど野暮な気は起こらなかった。

禁忌【1】

元治元年。

各所に密偵に入っていた島田魁、山崎進ら監察方の報告により、不審者、古高俊太郎が捕縛される。しかし古高の口は堅く、彼に口を割らせようと、土方は拷問を提案した。

一方でその知らせを茂則から受け取った総司は、拷問前に彼が囚われている牢に人目を盗んで忍び込んだ。それは情報を聞き出すためではなく、総司にとっては確認作業に近かった。

総司はこの先起こることを知っている。そして本来ならそれは表に出すべきことではない。だが総司の計画を執行するために古高に全てを話す気になってもらわないと困るのである。

おそらく古高は総司がすべてを知っているとわかれば、隠す気力など失うだろう。そうすれば土方らは時間を要することなく池田屋の企てに辿りつける。それが総司の狙いだった。

蠟燭の明かりだけが照らす薄暗い部屋の中で、総司の目は企ての鍵を握る男の姿を捉えた。

「古高俊太郎だな」

舌を嚙んで自害することを防ぐための猿轡が、古高が声を発することを妨げている。そのため総司の問いに古高は、首を縦に振ることで肯定を示した。総司はその肯定に満足して、牢越しに古高の前に腰を下ろす。

「今から僕が言うことに、お前は肯定か否定かを示せばいい」

冷たい床の感触を感じながら、さめざめとした声で、総司は自分の知る限りの陰謀の全容を話し始めた。そうして全てを話し終えた頃には、古高の顔は真っ青に染まっている。あまりにも詳細な語り口に、血の気も引いてしまったのだろう。目だけがお前は何者かと問い質している。それを見て、総司は自らの企てが成功する予感に笑みを浮かべた。

「僕は沖田総司。僕がいる限り、君たちの好き勝手にはさせないよ」
その瞬間、古高の顔は確かに絶望に彩られた。

後に土方が言うことには、拷問を始めた時、既に古高は黙り通す
気力を失っていたようだ。そして口を割った古高の証言で恐るべき
計画が露見した。祇園祭の宵々山で賑わう京の町に火を放ち、御所
を焼き払い、孝明天皇を長州まで連れ出そうというのだ。

そして、元治元年水無月の五日。この計画を阻止しようと近藤勇
率いる新撰組が、少数の隊士を率いて三条小橋に程近い池田屋を急
襲した。これが世に言う池田屋事件であった。

池田屋には、もはや動く者は自分を除いて存在しない。総司がそ
う思った瞬間のことであった。

「総司、お前なんてことを仕出かしたんだ！」

響いたのは進の怒鳴り声だった。普段御用改めには姿を現さない
はずの進がそこにいる。その意味がわからず、返り血を拭いながら
総司は、きょんととして首を傾げた。

「シゲ君、何をそんなに慌てているのさ」

「何って、お前、古高が計画を話す気になるように手を廻した上に、
池田屋に斬り込んだからだろ！」

進という名ではなくシゲと呼ばれたことも気に掛けず、進はまく
し立てた。だが総司は、進の言葉を何でもないことのように受け流
す。

「ああ、そのこと……」

「そのことって、お前、本来池田屋で行われていた密談は歴史上、
表舞台には出なかったはずのものだ。それが、お前のとった行動で
露見した。これは立派に歴史を変える、掟破りの行為だぞ」

感情の高ぶり抑えきれない成則は、総司の羽織の胸倉をぐいっと
掴み、鼻と鼻が触れ合いそうなほど顔を近付けた。そして、はぐら
かそうとする総司の顔を真正面から睨み付ける。

「総司、これが本当にお前がしたかったことなのか？」

進の問い掛けに総司は静かに微笑んだ。

守る——そう決めた事に後悔はない。総司は言葉ではなく目で語った。その表情に総司の覚悟を察したのだろう。進は静かに腕を放した。

「お前は……」

本当にそれで良いんだな、と進は問う。だが総司は、答えを返さないうちに喉の奥から込み上げてくる違和感に気づいた。その違和感を抑える暇も与えられず、

「つつ……」

咳き込んだ総司自身も、一瞬何が起こったのか分からなかった。そつと口にやった手を離すと、そこに赤い花が咲いている。ゆつくりと足元に目をやると、手に収まりきらなかった液体が一輪、二輪とさらに花を咲かせていた。

それを目に収めてやつと口の中に血の味が広がってくる。総司は血の味に目を丸くし、進は総司の咲かせた血の花に眉を顰めた。

「これは掟を破った僕への戒めってことなのかな、シゲ君」

本来不老不死の時の旅人は病に掛かることもないのだから、と総司は目を伏せた。進は総司の言葉を否定することもできなかったのだろう、しかし総司の手を取り、

「ともかく医療班のもとへ……」

と、自らの手にその血が付くことも気にせず、総司の手を強く引いた。

だが総司は、その一連の動作に身を任せることなく進の手を振り払った。まさか振り解かれるとは思わなかったのだろう。進は勢いを殺し切れずよろめく。

「駄目だよ、シゲ君。それじゃあ皆に心配を掛けてしまう」

体勢を立て直した進から少し距離をとって総司が言う。

「そんなこと言っている場合か！」

対する進は、声を荒げた。総司は進の声に体を震わせたが、それでも嫌だと聞き分けのない子供のように首を横に振る。

「……………」

迷うことは多いけれど、一度決断してしまったことを総司は曲げはしないということを、進は知っている。だからこそ、彼は黙っていてくれるだろうという確信が、総司にはあった。

「わかった、お前がどうしても医療班のもとに行くことを拒むものいうなら、俺と共に町医者に行こう。そこなら、お前のことを知る者もない。お前が懸念するようなことにはならないだろ？」

総司は少し迷ったが、やがてその選択肢を受け入れた意を込めてこくりと頷いた。

禁忌【2】

それから数日たった非番の日に、二人はは連れ立って、町医者の元を訪れた。しかし、結果は芳しくない。

「わからない？ わからないってどういうことですか！」

総司と進は、聞かされた診断結果に思わず顔を見合わせた。そして、進は眉間に皺を寄せて目の前に座る医者を睨み付けた。その迫力に冷や汗を流しながら医者が説明を続ける。

「症状は肺結核のそれなのだが、初めて血を吐いたにしては、吐血の量が多過ぎる。私もこんな事例は初めてで、今の医学ではどうとも判断しかねるのだよ」

医者はお手上げだと肩を竦めて見せる。だがそれで引き下がる訳にはいかない進は、身を乗り出して医者に問い掛けた。

「そこをなんとかするのが医者の仕事じゃないのか！」

「そう言ってくれるな。医者として私だってもどかしいんだ。一応、咳止めを処方しておくが、私にできるのはこれまでだ……」

そう言つて薬を包んだ紙袋を差し出し、医者は顔を背けてしまう。尚も納得いかない様子で進が口を開きかけたが、総司はそれを止めた。

「もういいよ、シゲ君、行こう」

総司はゆっくりと首を横に振り、医者に頭を下げるとその場を後にした。進は医者から薬を受け取ると慌ててその後を追う。

二人は、裏通りを抜け大通りに向けて歩いた。互いに暫しの間無言だったが、足を止め先に口を開いたのは進だった。

「総司、江戸時代の医学で駄目なら、未来に行けばいい。それならきつと治せるはずだ」

「シゲ君、駄目だよ。それはできない」

「どうして……」

「シゲ君、これは僕が掟を破った報いなんだ。だからどれだけ未来

に行つたところで治せる保証もない。それになりより、今僕がこの時代を離れる訳にはいかないんだ」

だからもうこれ以上そんなことは言わないでと総司は進に背を向けたのだった。

犠牲【1】

攘夷集団として結成された新撰組は、八月十八日の政変後、幕府に命じられて市中見廻りを主な任務にするなど、攘夷という本旨を見失いつつあった。

それは攘夷の志篤かった山南にとっては心の痛むところである。そのため山南はある計画を胸の内に抱くまでになっていた。山南はその思いを誰にも相談できぬまま日々を過ごすことになる。

そして、季節は流れ、冬も終わりに近付いた頃。

いつぞや成則が持つてきた手紙の通り、みつが京を訪れたのは、藤堂の勧誘による伊藤甲子太郎の入隊で慌しく過ぎた年越しから一息吐いた元治二年如月——そんな冬の晴れ間のことだった。

初めは自分が禁を犯したことを聞きつけてやってきたものとはかり思っていた総司は、いつものように接するみつの姿に、それまでにない安堵を感じた。久方ぶりの姉弟水入らずの日々は総司の日々募る心労を癒すには良薬であったのだ。総司はこの時期にみつが訪問してくれたことを有難く思った。

そんな折、

「明日、御墓参りに付き合って頂戴」

とみつがその言葉を口にしたのは、京に来てから三日が過ぎた頃のことだった。

夕暮れ時の京の街を連れ立って歩きながら、みつは事も無げに言ったのだ。総司は寒さに身を震わせながら、唐突なみつの願いに鵲返しに問い返す。

「墓参り？」

「ええ、そうよ」

みつの表情は寒さのせいなのか酷く強張って見える。総司はどう答えたものか考えあぐねて、さらに質問を返すことにした。

「でも、それなら姉上一人の方が……御墓と言うからには姉上の大

切な人のでしょうか？　僕なんかが行つていいの？」

総司の問いに対してみつは何かにか迷っているようであつた。それでも彼女は、「一人で行くのが辛い」とぼつりと呟きをもらした。いつもは決して弱音を晒さないみつが、今日は何だか弱弱しく見える。総司はそつとみつの手をとつた。

「奈都さん……」

思わずみつの真名を呼べば、みつの手に力がこもる。その手が震えているのを感じとつて、総司はその手を握り返す。

「わかつた。一緒にいこう」

その言葉に微笑んだみつの顔が、総司にはとても儚げに見えた。

その翌日。

羅生門跡から南にまっすぐ進むと、淀川が桂川と加茂川に分岐している地点に行き当たる。その分岐点からさほど遠くない、旅人が休憩をとる小さな峠茶屋が二人の待ち合わせ場所だつた。店先に備え付けられた椅子に腰かけ茶を啜っていたみつは、現れた人影に声を上げた。

「遅かつたわね、総ちゃん」

「待たせてごめんなさい。出掛けに土方さんに一つ遣いを頼まれてしまつて……」

どこか拗ねたように総司が言うと、みつは総司と土方の押し問答が想像できたのか苦笑を浮かべる。

「それなら仕方がないわね」

「でも、姉上をこんなに待たせてしまつて……」

「いいのよ、京に不慣れな訳でもないのだから。それよりも、謝る時間があるなら、早く目的地に向かいましょう」

話を切り上げてたみつは小銭を湯飲みと共に盆の上に置き立ち上がる。

勘定を済ませ、二人は並んで歩きだした。

葉が落ち、乾いた木枯らしに打ち震える木々が山の斜面に身を寄

せ合っている。道行く景色は変わり映えがなく、総司には今自分達がどのあたりにいるのかよくわからなかった。

しかしどのくらい歩いただろうか。

総司が疲れを感じるより早く、みつの足が止まった。

「姉上？」

総司が声を発すると同時に、みつは振り返った。

「これを登れば目的地よ」

みつが指差す先にはひっそりと山の頂に続くであろう石段がある。落葉樹の多い山々にあって、そこだけはその石段を隠すように、背の高い木と背の低い木が入り組んでいる。総司は、思わずぐくりと喉を鳴らした。その石段の数に眩暈を覚えたわけではない。この山を包む神聖な雰囲気には圧倒されたのだ。

「さあ、行きましょう」

思わず身を引いた総司の手を取り、みつが石段に足を掛けた。一歩――。促されるまま総司も石段に足を掛ける。

すると――景色ががらりと変わった。

驚きに視線を忙しく動かせば、先ほどまで自分達がいたはず石段の登り口が遥か下に見える。

（この石段、もしかして……）

総司は、この石段に覚えがあった。

だから、この山の頂上に在るはずのものも知っている。だがもしその予測があっているなら、この先に在るはずのものは墓などではないはずだ。総司は、自分の前を行くみつの背中を見詰めた。

（奈都さんはいったい何がしたいのだろう）

そう思った瞬間みつが振り返った。

「もうすぐ山頂よ」

みつの言葉と共に視界が開ける。そこには天を覆うように大きく枝を伸ばした桜の木が立っていた。

自分の予測は正しかったのだと総司は確信する。

「やっぱり、千年桜……」

その眩きを聞いて、みつは自嘲気味に笑った。

「知っていたのね、総ちゃん」

「どうやら、みつは総司がこの桜の存在を知っているとは思っていなかったようだ。」

「知っていたものにも、御墓参りに行くつもりじゃなかったのですか？」

「総ちゃんは、何か勘違いしているようだけれど、この桜そのものが私が言っていた御墓なのよ」

「この千年桜が？」

「ええ。総ちゃんは千年桜が旅人の記憶を糧として花を咲かせることは知っているでしょ？そして、この桜は記憶を差し出した旅人の墓そのもの……」

「じゃあ、姉上の大切な人は時の旅人だったの？」

「そう、この桜の下に眠る、私が愛した人は時の旅人だった」

「え、でも、どうして、その人は桜に記憶を差し出したっていうの。二人で楽しく旅をしてたんじゃないの？」

みつは一度目を伏せたが、顔をあげると葉のない桜の枝先を見詰めた。

「彼と出会った時、私はまだ旅人ではなかった。それどころか、私には親の決めた結婚相手がいた。それでも、私と彼は惹かれずにはいられなかった。だけど、結婚の日取りが決まった日、彼は言ったの、自分は身を引くと。私はてっきり彼は反対してくれるものだとばかり思っていた。私は泣き、彼を罵った。そこで彼は懸命に笑顔を作った。お幸せに。僕は君をこれ以上悲しませないように、君の中から消えるからと。そして彼は記憶を差し出した。でもね、私は彼を忘れなかった。だから、私もまた旅人となったの」

話しながらみつの頬を涙が伝う。総司は何も言わずみつの背に腕を回した。みつの悲しみも分かるが、記憶を差し出した旅人の男の気持ちも分かる。

大切な者を守るため、自らを犠牲にしたその男の気持ちは、総司

が抱いている思いときつと同じだ。

「ありがとう。もう、落ち着いたわ」

暫く泣いた後、みつは涙を拭い顔を上げた。

犠牲【2】

みつが泣き止み、二人で桜の木の下で今は亡き旅人たちへ祈りを捧げた後、二人は連れ立って山を下りた。

そして京の街まであとわずかというところで、街道を歩きかう人の中に見慣れた姿を見つけて、総司は首を傾げた。

「山南さん？」

山南はここ最近隊長が優れずに、部屋に籠ることが多くなっている。そのため外に出掛ける山南の姿を見たのは本当に数日ぶりだ。しかしそれは良いことのはずなのに、違和感が拭えない。山南の隣に旅装のような荷物を抱えた見慣れない女が寄り添っていることが総司の違和感を増幅させた。

「何してるの、総ちゃん。早くしないと置いていくわよ」

だがその違和感の正体を掴む前に、急かすようにみつの声が掛かる。総司は違和感を振り払うように頭を振ってみつに従った。

それから甘味処で休息をとり、みつと別れて総司が屯所に帰りついたのは、昼を少し過ぎた頃だった。いつもなら昼食の後の昼の稽古や、午後の見廻り準備が始まっている時間である。しかし、今日はどこか静かだった。

「総司、お前帰っていたのか！」

総司が首を傾げながら屯所の中を進んで行くと、対面から近藤が慌てた様子でやって来た。局長という座についてから常に落ち着いた振る舞いを心掛けていた近藤のあまりの慌てように、事の内容は分からないまでも、その深刻さだけは察することができる。

「近藤先生、落ち着いて下さい。僕の留守中に、いったい何があったんですか？」

近藤はゆっくりと息を吸いそれを吐き出した後、手にした紙を総司に差し出した。総司はそれを受け取り、目を落とす。

『私はいやしくも総長の職にあるのに、その意志が隊に反映されな

いのは、土方歳三らのためだ』

そう取れる内容が、几帳面で丁寧な字で綴られていた。これを書いたのは文面からいって山南さんだ。このような手紙を残す意味を悟って、総司は血の気が引くのを感じた。

（街道で見かけた山南さんの姿旅装に近くなかっただろうか）

すなわちこれは山南の新撰組からの脱走を意味している。

（どうして山南さんが脱走なんて……）

総司が未来で見てきた歴史では、近藤が拘束された後、試衛館時代からの仲間も含め函館に渡った新撰組はそこで皆で最期を迎える筈だった。総司は池田屋ではその歴史を変えるために禁まで犯したのだ。それなのに、こんな所でそれが無駄になるといつのか――。

「つく……」

感情が高ぶった総司は、奥歯をぐつと噛み締め、その感情の波をやり過ぎそうとした。しかしそれは無駄なことだった。握りしめられた手の中で、ぐしゃりと置き手紙が握り潰される。

「総司？」

近藤が訝しそうになを呼んだが、総司は黙って踵を返した。

「おいっ！ 総司、どこへ行くんだ。山南さんを連れ戻すつもりなら、止めておけ。あの人にはあの人なりの思うところがあつてのとだろうから」

山南の急な脱走には動揺の色を浮かべていた近藤だったが、山南の脱走自体には肯定的なようだ。

その思いを感じとって、総司は思わず足を止めた。

近藤の言葉には、どこか喜びの色も窺える。近藤は近藤で、部屋に籠りなにやら思い悩んでいた山南のことを案じていたのだろう。思い悩んだ末に山南が出した答えが脱走なら、近藤はそれを受け入れるつもりだ。

「近藤先生、でも……」

どちらが山南にとって最適なのか――それは総司にもわからない。だから総司の中にも一瞬の迷いが生まれた。

追うべきか。追わざるべきか。

そんな中、総司の迷いを振り払うように、助け船を出す声が響く。

「行かせてやれよ、近藤さん」

「歳っ！」

近藤の後ろから姿を現したのは土方だった。彼の名が書かれていたために、近藤は土方にその文を見せていなかったのだらう。彼が現れたことへの驚きが顔にありありと浮かんでいる。

土方の後ろに永倉や原田がいることから、土方は二人からことの次第を聞き及んでやって来たのだらう。

「どうしてそんなことが言えるんだ、歳。連れ戻したところで、法度がある。脱走者に待つのは死だけなんだぞ」

局中法度。それは一・土道に背きまじきこと、二・局を脱するを許さず、三・勝手に金策いたすべからず、四・勝手に訴訟取り扱うべからず、五・私の闘争を許さず、という隊内での禁令五か条のことであり、背きし者には切腹を申しつけるものである。

「だからって追いもしなかったら、他の隊士に示すがつかないだらう？ 局長達は、馴染みの山南の脱走を見逃したのかつて、隊士達に不満が広がる」

それは尤もな事だ。隊内の規律を守るために定めた法度を幹部自ら破ることは、隊の規律の崩壊に繋がる。逆に言えば、幹部自ら率先して法度を守れば、その分隊内の規律意識は堅いものになる。

近藤は土方の言葉に唇を噛んだ。

土方の考えは正論で、返す言葉が見つからず、自らの気持ちとの折り合いがなかなかつかないのだらう。

それ以上近藤が言葉を口にしないことを確認して、土方は一つ大きく溜め息をついて総司に目を向けた。

「総司、お前に山南の追跡の命を申し渡す」

そこで一旦言葉を区切り、土方は総司の耳元に顔を寄せた。

「でも、いいか、総司。万一、もし万が一でも日が暮れるまでに山南に追いつけなかったら帰って来ても構わない」

万が一と含みを持たせた言い方に、総司は頷いた。

山南に戻る意思がないのなら、見逃しても構わない、土方は暗にそう言いたいのだろう。鬼と呼ばれながらも、土方が不器用な優しさを持ち合わせていることを総司は知っている。

総司は「大丈夫ですよ、近藤先生」と心配する近藤に言葉を残し、厩へと急いだ。

犠牲【3】

「お迎えが来たようですね」

「え？」

次第に近付いてくる蹄の音に山南が眩きをもらった。道端にしゃがみ込んで花を見詰めていた女は、その眩きに不思議そうに山南を見上げた。その女に優しく微笑んで、山南は別れの言葉を口にする。「どうやら、お別れの様です。最期にあなたと旅が出来て良かったですよ、明里」

その言葉の意味を的確に感じとって、女――明里は縋り付くように山南の衣の袖を引っ張った。

「行かないで下さい。私は、山南さんと故郷に帰り、所帯を持つのが夢だったのですから」

だが山南はその手をそっと払い、首を横に振る。

「明里、その言葉はうれしいが、私には戻って成さねばならぬことがあるのだよ」

明里はもう一度山南に縋ろうとしたが、それを遮るようにして山南の名を呼ぶ声が響いた。

「山南さん！」

街道を懸命に馬で駆けてきた総司がやっと山南の姿を見つけて声を上げたのだ。山南は声の方へ目を向けた。点でしか確認できなかった馬の影がもう馬上の人影まで確認できる距離まで近づいていた。馬上の人物を確認して、山南の表情は心中複雑そうに歪む。

「沖田君が来たんですね」

歳若い彼は私を責めるだろうか、と山南はそれだけが不安だった。自身の行いに後悔はないが、総司が歳若い故に感情を曝け出したなら、山南もまた本心を曝け出さずにはいられないような気がしてならない。

「山南さん……やっと追いついた」

額にあせを浮かべ休憩もとらずに馬を駆ってきたであろう総司に、山南は顔に本心を覆い隠すように笑顔の仮面を貼り付けた。総司がその笑顔を自嘲だと捉えてくれることを願って。

馬を駆りながら総司は思う。

自分が禁を犯したように、何かしら理由がなければ掟など破らないものだ。

山南はどんな思いがあつて法度を破つたのだろうか。山南自身に理由を聞かない限り、総司には納得できそうにない。

それが総司が山南を追おうと決意した理由であつた。そして見つけ出した山南の姿に総司は声を張り上げる。

「山南さん！」

「やはり、見逃してはくれなかったようですね」

馬から飛び降り、総司は山南に近付こうとしたが、山南はさっと身を引いて二人の間を保った。

「僕は、そんなつもりじゃ……」

「じゃあ、どういつつもりだと言うのですか？」

「僕は、あなたの脱走の理由が知リたかつた。そして、出来ることならあなたに思い留まって欲しいと思つて……」

「脱走者に待つのは死のみ。それは君も御存知の筈でしょう」

脱走——。山南は自らの行為を脱走だと肯定した。その言葉に、総司は唇を噛み押し黙つた。山南さえこの行為を脱走だと認定していなければ、まだどこかでこの現実の打開が可能だと思つていたからだ。

「まあ、死ぬ覚悟はしてましたから、私はここにきて、まだ逃げようなんて考えませんよ」

死ぬ覚悟——それではまるで最初から死を選んでいたような口ぶりだ。

総司は山南の顔をまじまじと見詰める。山南は尚も捕まっていたことを自嘲するように笑っていたが、瞳の奥には嘲りの色はない。むしろ、計画がうまくいったことを喜ぶような安堵の色が窺える。

（それが、山南さんの本心なの……）

総司はそこではたと気が付いた。

（あなたもまた僕と同じなのですね）

総司が山南の身柄を確保し、屯所に帰りつくと、永倉が声を張り上げて駆け寄ってきた。近藤もそれに続くように渋い顔をして、ゆつくりと歩み寄ってくる。総司は近藤に山南の心意を伝えようと口を開きかけたが、それは山南によって制された。

「脱走を試みたことに悔いはありませんよ」

山南の処遇に関して迷いがある近藤に、山南はそう言っただけで微笑みかけた。

私に処罰を下すことを恐れる必要はない、と山南の言いたいことが総司にはわかる。

側にいた総司はその思いを察して、静かに目を伏せた。

「山南さん、本当に脱走したことに悔いはないのかい？」

「ええ、当初の志を忘れ掛けている新撰組に私は嫌気が指したのですよ」

半分本当で、半分は嘘。

そして、その嘘は優しい嘘。

でも総司にとっては、とてつもなく辛い嘘のように聞こえた。

その嘘を感じとったのか、はあ、と近藤は溜め息を吐いた。山南が連れ戻された時点で答えなど一つしか残されていない。けれど山南を前にして近藤はやっとその決断を下す決心がついたのだろう。

「脱走者には切腹を申し付ける。それはあなたであっても同じことだ、山南さん」

「私は、侍として潔くその裁きを受け入れますよ」

山南の言葉を聞き、総司は拳を握り締めた。同じように近藤も何かを堪えるようにして、山南からは見えない位置で拳を握っている。「先ほども言ったように私に悔いはありません。唯、最後に一つだけ私の願いを叶えてくれませんか？」

可能なことなら、と近藤は頷く。

「介錯を沖田君にお願いしたいのです」

その場にいた全員の目が総司に向いた。顔を伏せていた総司だったが、自然と顔を上げざるを得ない。

「僕が……？」

総司が信じられないと山南を見やれば、山南は自らの言葉を肯定するように頷いた。

「私は、あなたにお願いしたいのです。沖田君。やってくれますね？」

山南さんの最後の願いを無下など出来ない。

総司は黙って頷いた。泣きたいような、怒り散らしたいような不思議な感覚が胸の内に沸き起こってきていた。

元治二年二月二十三日――。

山南敬助、切腹。

介錯は沖田総司により行われた。

その晩、屯所の薄暗い部屋の中、総司は膝を抱えて蹲っていた。きつく膝を抱き寄せて、その中に顔を埋める。山南の介錯をした感触がまだ残っていて、気持ち悪くて部屋から出る気にも慣れなかった。そして何より、こうでもしていないと涙が出そうになるのを押さえられそうにもなかった。何度洗っても取れない血の臭いを嗅ぐ度に思い知らされる気がした。違^{たが}うこと無き定められた歴史を。

「何かを守るには、犠牲はつきものだ」

いつしか自分に言い聞かせたその言葉が身に沁みた。

山南は、新撰組の規律を守るために意味ある死を望んだ。それが分かっているからこそ、総司は守りぬくことをこの日山南に誓った。

の
だ。

語り継ぐ者【1】

雨の降り出しそうな空を縁側で眺めていた総司は、門を抜けやってきた人影を見つけ声をあげた。

「す、す、む、くーん。おかえり！」

進は一週間ほど前から、攘夷浪士が出入りしていると思わしき宿の張り込みのため屯所を留守にしていた。その進が帰ってきたものだから、総司は縁側から腰を上げ、進の背に背後から勢いよく飛びついた。

近頃、総司は山南の死を振り払うように殊更明るく振舞うことが多くなっている。それでも進は変わることなく、総司を怒鳴りつけるのが常だった。しかし今日は進の反応が返ってこない。

「どうしたの、進くん」

総司は訝しく思ってから回した腕を解いた。

進は黙って微動だにしない。

「ねえ、どうしたのさ？」

「……が居た……」

進の眼前に回り込んでその顔を覗き込んだ総司に、進はぼそりと何かを呟いた。だが、それはあまりにも小さな呟きだったため、総司には聞き取ることができなかった。

「ごめん、進君もう一度言ってくれる？」

総司は進に耳を近づける。進は意を決したように再び言葉を搾り出した。

「遥華がいたんだ」

それが音になった瞬間、時が止まったかのように二人は黙り込んだ。

屯所の道場のほうから聞こえる竹刀のだけが唯一、時の流れを表している。

二人にとってその名はあまりのも馴染み深く、それでいて計り知

れない重さを思っている。

二人がこうして出会う切欠を作りだした人物であると同時に、遥華は謎多き人物である。けれど彼がこの時代にいる意図はかならずどこかにあるのだろう。

しばらく、そうして黙り込んでいたが、先に時を動かしたのは進だった。

「偵察に行った宿屋に、攘夷浪士たちと共に遥華が居たんだ」

進が話し出したことに感化されて、総司も呪縛から解かれたように喋り出す。

「どうして遥華が！時の案内人である遥華がいるなんて……まさか！」

そこまで口にして、総司は、時の案内人である遥華がむこうにいる理由に思い至ってはつとした。

（遥華がむこうにいる理由なんて一つしかないではないか）

「おそらくそのまさかだろう。むこうにも、時の旅人がいるんだ」
知りたくもない真実を知ってしまった。

頬を雨粒が打つ。

朝方から嫌な予感がしていたが、とうとう降り出したようだ。嵐になる予感がして、総司は雨の冷たさに身震いをした。

時の案内人は、久方ぶりに降り立った地で、先程まで物陰に隠れこちらを窺っていた気配がなくなったことに気づいて目を細めた。

こちらが気付いたのだから、おそらくシゲも気付いたことだろう。
人の出会いは戯曲を織り成す――。

これから彼らはどんな戯曲を見せてくれるのだろうか。

遥華は窓辺に腰掛けて、いつの時代の歌かわからない鼻歌を雨音に合わせて口ずさんだ。

「遥華、今日は随分と機嫌がいいな」

その鼻歌につられ、居合わせた男は刀の手入れをする手をとめる。歳の頃は、二十歳といったところだろうか。髪は鬘を作ることとはせずに後ろ手で一括りにされている。金の髪の遥華と並べば、人々はどこか外国の商人の護衛と判断しただろう。だがここへ来た目的を考えれば、目立つことは得策ではないことはわかりきっている。

遥華は、普段はその金髪を隠しているため、騒がれることは避けられた。

だが遥華は今、その長い金髪を惜しげもなく晒している。こうして無防備になるのは彼の気分がとてもよい時だと男は理解していた。「そんなに機嫌がええかな？」

「ああ、いつもより断然よく見える」

出会って間もないこの案内人は、わからないことだらけだったが、男には機嫌が良いということだけは断言できる。

「何か良い事でもあったのか？」

男の問い掛けに、遥華はもったいぶったように唇に弧を描く。

「時が来ればわかるよ」

そう言つて、遥華は通りに目を戻してしまった。

語り継ぐ者【2】

その日もまた雨が降っていた。

縁側で草木を打つ雨粒を見詰めていた総司は、湿気のため広がった髪を結び直して、空を見上げた。黒い雨雲が空を覆っている。朝から降り続いている雨は、一向に止む気配を見せない。

今日は総司の率いる一番隊が市中見廻りの当番の日で、この雨の午後から町にでなければならぬ億劫さから溜め息を吐く。雨は嫌いではないが、如何せんこう雨ばかり続くと気が滅入って仕方がない。その上、七月というと、気温が高くなるため異様に蒸し暑い。それがさらに気分を下落させるのだ。

結い上げたことで少し風通しがよくなった首筋に浮かんでいた汗を拭って、総司は考えた。

（暑いし、今日の市中見廻りさばりたいなあ）

だが自分と呼ぶ隊員の声が聞こえて、その考えを振り払うように首を振る。

（いかん、いかん、そんなことしたら、土方さんになんて言われるか。それに、自分がここにいる本分を忘れてはいけない）

総司は呼び声に、「今行く！」と返事を返し、羽織を手にしち上がった。

雨の所為もあって、いつもは賑わいをみせる京の大通りの人影は疎らだった。といっても、いつもより少ないというだけで、傘を差した者たちが着物の裾を汚さないように器用に行き交っている。そんな中を、雨が少し小降りになったことをいいことに、傘を差さずに歩く。いつもは颯爽と風を切ってなびく羽織が、今日は妙に重たい。

「隊長、雨がまた酷くならないうちに早く見廻り終わらせちゃいま

しょう」

隊長である総司を除いて、一番隊の中で一、二の剣の腕を誇る男が後ろから呟きをもらす。総司も同じような思いだったので肯定の意を表そうとした。だがこういう日に限って仕事が増えるものだ。通りの片隅に佇む進の姿を見付けて、その言葉は飲み込まざるを得なくなった。何食わぬ顔をしているが、他の隊員も進の姿に気付いたらしい。総司は隊員たちに、自分は後から追いつくから通常の見廻りを続けるように指示を出すと、裏通りに消えた。

しばらく裏通りで待っていると、示し合わせたかのように進がやってくる。

「総司、お前仮にも病人なら傘ぐらい差してきたらどうだ」

羽織の藍色が雨に濡れて濃くなっている。その羽織が雨具代わりになって、服はあまり濡れていないのだが、進は手にしていた傘に総司を招き入れた。

「大丈夫だつて。第一、もしもの時に傘なんて邪魔になるだけだし

……」

「人の忠告は素直に受け取っておくものだぞ」

シゲくんは心配性だなあ、と苦笑を浮かべた総司の頭を成則が小突く。

「ところで、監察方のシゲくんがわざわざ市中見廻りを待っていたなんて、何かあった？」

小突かれた箇所を擦りながら総司が尋ねた。進は肯定を表すように頷く。

「三条通りから程近い丹寅という料亭に攘夷浪士が集まっているようだ。任せていいか？」

「了解。でも、その料亭って池田屋のとき、土方さんたちが出向いた宿の離れでしょ？ 案外灯台下暗しってことかな」

「そうかもしれないな」

総司の言葉にその考えを察したのか、成則は眉を寄せる。

「遥華の連れの旅人に会えるかな？」

旅人としての仲間に出会えることを喜んでいるのか、それとも、その旅人と戦うことを臨むところだと意気込んでいるのか、総司の表情はどちらとも判断しかねた。

「じゃあ、俺は戻って奴らの動きを張っているから、お前は隊を率いて、早めに来いよ。言っておくが、無茶はするな」

「わかつてるよ。じゃあ丹寅でね」

落ち合う場所を確認するようにもう一度口にして、そのまま先に行かせた隊員の後を追うため、総司は通りに消えた。

「御用改めである！」

隊の一部を裏口に回らせた総司は、大きく息を吸うと、料亭の入口で大声を上げた。

その声を聞きつけた料亭の責任者らしき男が、慌てた様子で奥から出てくる。彼は進路を塞ぐようにしてその場に膝を折り、丁寧に一礼をした。

「これは、これは、新撰組の皆様。今日はこういった御用件で？」

「こちらに不逞浪士どもが寄り集まって、何やら相談事をしていると聞き及んだんですよ。あがらせてもらいますよ、主人！」

主人が嫌な顔をするのも構わず、自分の後ろに控えた数名の隊員に合図を出す。彼らに従えて総司はどかどかと宿に足を踏み入れた。昼時は過ぎている上、一番客が入る夕刻にはまだ早い。総司は迷うことなく唯一気配が窺える部屋に足を向けた。

部屋の中の気配を確認して、すっと腰から愛刀を引き抜く。数は四、五と言ったところだろうか。逸る気持ち落ち着かせるため深呼吸をして襖に手を掛けた。

「浪士ども、新撰組だ、神妙に致せ！」

襖を勢いよく開けたと同時にきらりと刀が翻った。同時に、キンツという金属音が響く。そのまま斬りかかってきた相手の力を利用して、流れるような最小限の動きでその刀を退け、懷に飛び込ん

だ総司は、相手をいとも容易く斬り倒した。

ぐっ、と苦しそうに呻いて倒れていく相手を後目に、総司は部屋の中にまじまじと目をやった。二、三人の男達が抜き身の刀を手に睨み付けてきていた。だが、座布団の数からすると男たちの人数が少な過ぎる。

おそらく、この男達は足止め役で、残りは裏口に向かったのだろうと目星をつける。もしかしたら、この男達が足止めを買って出るほどの重要人物が居るのかもしれない、と部屋に残っていた浪士を瞬く間に斬り倒した総司は、後片付けを従ってきた隊士に任せ裏口へと急いだ。

辿りついた裏口では、もう既に戦闘が始まっていた。刀のぶつかり合う音がどんよりとした湿気を帯びた空気の中にいたく鮮明に響いている。

ちょうど刀を交えていた浪士を斬り伏せた隊士が、総司に気付き声を上げた。

「隊長、ここは任せて追って下さい！」

声につられて目をやると、ちょうど浪士が三条の方の大通りへと繋がる小さな通りに姿を消そうとしている。まだ日が暮れていない今の時刻、闇に乗じて逃げることは無理でも、人波に乗じて逃げることは容易い。いくら雨で普段より人通りが少ないとはいえ厄介だ。総司はその言葉に従いその後を追った。

追ってくる総司に気付いたのか五人ほどいた浪士は十字路で三方に別れ、散り散りに逃げる。総司はチツと舌打ちをした。相手も馬鹿ではないらしい。

総司は少しでも多くの浪士を捕えようと、人数の多い道を選ぶ。多少の人数が多かったところで総司は負ける気などしなかった。

「待て！」

総司の声に浪士の一人が足を止める。

「先に行け！」

二人居たうちの年配の浪士が、二十歳くらいの若い浪士を庇うように立ち塞がり声を上げた。歳若い浪士は、その年配浪士を心配そうに見詰めたが、その声に促されるまま駆けて行った。

「お手合わせ願う」

すつと腰に差した刀を鞘から抜き、道を塞ぐように立ち塞がった浪士は刀を構えた。

（仮にも一番隊隊長である自分に勝負を挑むなど、面白いではないか）

ふつと笑って総司も同じように刀を構える。

「いざ、勝負！」

気合を入れるような一喝の下、刀が交差する。勝負は一瞬のうちについた。浪士は多少なりとも剣の腕に自信があつたにか、はたまた、こんな若造に負けはしないと思つたのかもしれないが、天才と呼ばれる総司にとつてはたいしたことない相手だつたのだ。だが例え勝負が一瞬のうちについたとしても、先の浪士を逃がすのには十分な時間だつた。もう、先ほどの浪士は大通りまで行き着いただろうと思いつつ、刀に付いた血を払うと、総司は駄目もとで浪士を追おうとした。

しかし、総司の予測は思わぬ形で破られた。

少し進んだ先で、先ほどの浪士が白い物体に進路を塞がれて立ち往生していたのだ。総司は、しめたとばかりに浪士に斬りかかろうとした。だが、

カタツカタツカタツカタツカタツカタツカタツ

と一斉に白い物体が乾いた音を上げる。その音を聞いた瞬間、その障害物の正体に気付いて、総司はさつと青ざめた。自然と足は一步、二歩と抗体を始めている。

音をあげたその白い物体は、何体もの白骨だつた。そして、その白骨の正体を、時の旅人である総司は誰よりも理解している。

時の彷徨い人――

永遠を求め、時を彷徨う彼らは、時の旅人を喰らう存在。いわば時の旅人の天敵なのだ。

カタツカタツカタツカタツカタツカタツ

再び、時の彷徨い人が一斉に顎を打ち鳴らす。

彼らは歓喜しているようだと思つた。だが彼らはいつまでも自分に襲いかかる気配がない。その事実には総司は首を傾げる。

（これではまるで、奴らの狙いはあの浪士のようなではないか）

そして傍と気が付いた。

（彼こそが遥華の連れの旅人なのか？）

「くそっ！」

白骨に囲まれることで今まで体を強張らせ、身動き一つ取らなかった浪士が、意を決したように彷徨い人に斬りかかった。それが始まりの合図だったかのように、対する彷徨い人がわつと浪士に向けて襲い掛かる。浪士の黒い髪が見る見るうちに白の中に埋もれていくのが見えた。しかし、その黒がすべて埋まってしまう前に、自分の横をもう一つの黒が通り過ぎた。何だ——とその正体を確認する暇もなく、その影は彷徨い人を手にした刀で斬り倒すと、その中に埋もれていた浪士を引きずり出す。それと同時に、影の主の顔が窺い知れた。

「シゲくん、なぜ助けるのさ！そいつは攘夷浪士じゃないか！」

掴んでいた浪士の襟首を離し刀を鞘に収める進の姿に総司が声を上げる。声にした方に成則が顔を向けた。その傍らで同じように浪士も顔を上げている。

助けられた浪士は総司の声に我に返り、やっと自分が新撰組の者に助けられたのだと理解できたらしい。

不審の目を横に立つ成則に向けていた。

「助けるも何も、彷徨い人を静めるのが俺の仕事の一つでもあるからな」

成則は白い砂と化した彷徨い人を忌々しそうに見詰め、小さな砂

山を成していたそれを蹴り崩した。総司はその行為に、成則は彷徨い人に祖母を殺されたも同然だったのだと思い出して謝罪する。

「ごめん。無神経なこと言っちゃったかも」

「いや、気にするな。お前が言ったことも一理ある」

成則はそう言つと、先ほどから声一つ発しない浪士へと目をやった。自然と視線がぶつかり合う。さらに総司の視線も横から受けて、浪士はまるで日差しを受けて熱くなった岩盤に足をのせた瞬間のように、肌に突き刺さる視線に耐えられず、反射的に視線を逸らした。「ねえ、シゲくん、本当にこいつ、時の旅人なの？」

その浪士の余りにも情けない態度を目に、総司が顔を顰めた。対する男は、単なる新撰組の隊士だと思つていた相手が、時の旅人のことを知っていることに目を丸くしている。

「彷徨い人に狙われるのは時を渡る力を持つ者だけだ。まず間違いないだろう。それに、遥華が居たこともこれで辻褄が合う」

遥華という名を出した瞬間、今まで目を丸くして固まっていた浪士の肩が僅かに震えたのを二人は確かに見て取った。それは、遥華のことを知っていると云つていても同然の行為である。総司は進と顔を見合わせると二人同時に溜め息を吐いた。

「旅人さん、あなたの名は？」

浪士はなぜ名を聞いたのか分からなかったが、いくら新撰組といつても助けてもらった手前無碍にもできず、渋々ながら名を口にする。

「修平」

「そう、修平、遅ればせながらご挨拶。僕は時の旅人、蒼矢。この時代では、沖田総司と名乗っている」

「沖田？まさか、新撰組一番隊隊長の！」

沖田と聞いたとたん修平の顔が青ざめる。予想した通りの反応に、総司は「僕も有名になったもんだね」と苦笑を浮かべた。その隣でどうしたらこの場でそんな台詞が言えるのかと進が呆れ顔をする。だが、修平の方には余裕は無かった。

「なぜ新撰組に時の旅人が居るんだよ！」

「僕らにしてみたら、その言葉そっくりそのまま君に返したいんだけど」

いつのまにか自分が時の旅人だと認める形になってしまった修平は、二の句もつげないで言葉を詰まらせた。

それをいいことに総司が言葉を続ける。

「別に本来他の旅人がどこで何をしようが構わないのだけど、僕らの場合敵対する勢力についているでしょ？ それって所謂不毛な争いじゃないのかな。時の旅人は、時の流れの外を生きるために不老不死なわけだし……。だからさあ、この時代から手を引いてくれない？」

鋭い眼光に射抜かれて、修平は喉元に刀の切っ先を突きつけられたような感覚を味わった。だが自分もこの時代を気に入っている以上、はいそうですかと引き下がりはたたくはない。

「いいえ、引きたくありません。それに、仮にも時の旅人なら、あなたはご存知のはずでしょう？ この先新撰組が辿る末路も……」

「馬鹿！ それは禁句だ！」

進の怒声が聞こえるのが早いか、最後まで言い切らないうちにぶわっと風が起こる。総司が修平に真剣を向けている。修平が進の言葉に反応して思わず身を引かなければ、腕を一本持つていかれていただろう。

「言っておくけど、新撰組は滅びないよ。僕が守ってみせるんだから」

「歴史を変えることは、掟破りですよ」

「そんなの知ったことか。だから、そのために君は邪魔なんだよ。手を引かないと言うのなら、手を引かざるを得なくするまで」

「止めておけ、総司」

「シゲくんは黙ってて」

総司は、進の制止も聞かずに刀を構え直す。修平はそれを見てとって、彷徨い人との交戦時に折れてしまった刀を捨て、隠し持って

いた小刀に手を掛けた。

だが息苦しいまでの緊張感に包まれていた空気は、刀を交える直前に緊張から困惑へと変化した。

総司の体が怪我を負った訳でもなく傾いてきたのだ。

修平は思わず手を伸ばしその体を支えた。

瞬間、ごぼつ——と総司が咳き込んで、服に生温かいものが染み込んでくる。何が起こったか確認する前に、進が修平の腕から総司の体を預かった。重みを感じられなくなって、修平はやつと思考が追いついたてきた。口元を血に濡らす総司の姿を見て、顔色を変える。

「蒼矢さん、あなたもしかして……」

時の旅人は本来病気などしない筈なのにと考えて、修平は一つの結論に至っていた。

だがその予測を確かめる前に、総司が震える手で振るった刀が頬をかする。考え事をしていて油断していたため、ぱらりと頬に掛かっていた髪が舞って微かな熱と痛みが修平の頬を侵した。

「総司、止せ！ そんな体で……」

横から進が総司の刀を持つ手を押さえつけて、刀を納めさせようとする。しかし、総司はそれに大人しく従いはしなかった。

「止さないよ。彼が僕の敵である以上、新撰組を守るため、少しでも不安要素は減らしておきたいと思うのは当たり前じゃないか」

どんとんと血の気の失せていく青白い顔で、総司は進を睨み付けている。

「シゲくん、離して」

だが進は腕の力を緩めなかった。そして総司に言葉を返すより先に、修平に向かって叫ぶ。

「早く行け！ 今のうちに！」

進の行動の真意は分からなかったが、修平はぺこりと頭を下げると、言われた通りに踵を返した。後方で何やら言い争う声が聞こえたが振り返ることはしなかった。

語り継ぐ者【3】

修平の姿が見えなくなつて、総司は進の腕の戒めを破るのを諦めたのか、反発するように掛けていた力を抜いた。それに応じて進も掛けていた力を抜く。戒めがなくなつたのをいいことに、総司は振り向き様に進の頬を平手で引つ叩いた。

「どうして奴を逃がしたのさ！」

悔しそくに唇を噛み締めながら総司は、赤く腫れた頬を擦る進を見詰めた。感情の高ぶりに任せて喚く総司の姿は、冷静とは言い難い。

「少し落ち着いたらどうだ？　いくらお前が強かつて、その体では二人ともただでは済まなかつただろう？」

「そんなことやってみなくちゃ……」

ふらりと総司が進の腕の中に倒れこむ。気を張り過ぎていたのか、総司はどつと疲れを感じた。

「ほら見る。屯所まで運んでやる。お前は寝てろ」

進が眉間に皺を寄せながら言う。そんなに眉を寄せていると土方さんみたいになつてもしらないからなと思つたが、総司にはそれと言う力はもう残っていなかった。

「ごめん」

一言謝つて、総司は意識を手放した。

「遥華！」

宿の階段を駆け上り、目的の自物の名を呼びながら、修正は襖を勢いよく開ける。

「なんや、騒々しい」

部屋の中央で行儀悪く胡坐を掻き、瓦版に目を通していた遥華が

顔を上げた。修平はすかすかと遥華の元まで進むと、服が汚れているのも気にせず、その隣にどかりと腰を下ろす。

「どないしたんや、修平、疲れた顔して……」

「新撰組の沖田総司に会った」

「ほう、そりやまたけつたいやな」

遥華は修平が沖田の名を出しても、別に興味がないと言いたげに再び瓦版に視線を落とす。

その態度が気に入らなくて、修平は遥華の手元にあった瓦版を奪い取ると、びりびりと破り捨ててしまった。

「彼は時の旅人だと名乗った。遥華、お前は彼の正体を知っていたはずだ。なぜ言わなかったんだよ！」

瓦版の切れ端を手にとって、「これじゃもう読まれへんな」と呟いて遥華は修平に向き直る。

「もし言うてたら、あんさんはどうしていたと言っんや？ 同じ旅人である総司の居る新撰組の側に付いとったんか？」

「そ、それは……」

自分は強い人間ではない。守りたいからという思いだけで、歴史では負けると分かりきっている側に付くほどの度胸はないのだ。

「ほら、答えられへんやろ？ あんさんが総司のこと知れば、変に氣い遣つてまう思とったからな。だから、自分で知るまで黙ってたんや」

何かうまく言い包められている観は否めなかったが、そういう言い方をされるとそれ以上追求は出来なくなる。こういうところで遥華はずるい。

「で、総司は元氣やったか？ シゲにはこの前会ったんやけど、総司にはまだ会ってへんねん」

遥華の問い掛けに修平は答えとなる言葉が見つからなかった。総司の病氣の原因が自分の予想通りならば、尚の事、言ってはいけないことのように思える。

「まあ、時の旅人である限り元氣なんは当たり前か……」

修平の気も知らないで、遥華は自己完結を下すと、

「せや、人気の店で一時間ほど並ばんと入手できへん団子が手に入ったんやけど、一緒に食わへんか」

と包みを取り出した。しかし、修平はそれではいけない気がした。

「遥華、今から蒼矢さんとこ行つてこい！」

「はあ？ 何を言い出すのかと思えば、どないしたんや？」

口に運び掛けたみたらし団子の串から、たれがぼたりと畳の上に落ちた。遥華が慌てて布巾を捜しに動き出す。それを気にせず、修平は遥華の姿を目で追いながら言葉を続ける。

「別にどうもしないけどさ。ただ、このままだと決まりが悪いから、話しつけてきて欲しいって言ってるんだよ」

「そんなん、自分で行けば良いんとちゃう？」

布巾が見付からなかったのか、遥華は畳に落ちたたれを、先ほどの瓦版の切れ端で拭き取りながら答えた。

「言っておくが、俺は蒼矢さんに切られかけたんだぞ。そんな相手にこのこ会に行けるか」

修平は少し卑怯な気もしたが、これに関しては遥華の目で現状を見てきてもらう他ないと思う。遥華は甘味に関しては労力を惜しまないくせに、わざわざ出向く労力が惜しいとばかりに眉を寄せた。けれど、何も言わないところからすると了承したらしい。

修平が言葉としての了承を待っている中、遥華は手にしたみたらし団子を頬張った。甘い物を得たことで、眉間の皺も自然と解ける。そして遥華は満足したと言いたげに顔を綻ばせて立ち上がった。

「これ、捨てといてえな」

口の中の団子がまだ飲み込めていない状態でもごもごそう言つて、みたらしのたれで汚れた瓦版を山形に放つて寄越す。やまなり

修平が反射的に両手でそれをキャッチすると、べたりとたれが手に付いた。

修平は「こんなもの放つて寄越すな」と怒鳴ろうとしたが、遥華が今まで居た空間が空白になっていることに気付くと、そこから視

線を左にスライドさせる。

「ちようと出掛けてくるさかいに、留守番よろしゅう」

ちようと襖に手を掛けていた遥華は、空いている手をヒラヒラ振って出て行ってしまった。

ひんやりと額に触れた感触に、総司はうつすらと目を開け、額に手をやる。そこには湿らせた手拭いが置かれていた。

「落ち着いたか？」

傍らに桶から上げた手を拭う進の姿がある。どうやら手拭は進が置いてくれたらしい。

総司は布団の上に手拭いが落ちないようにそれを手に取った後、ゆつくりと体を起こした。それに手を貸した進が肩から上着を掛ける。

「ありがとう、シゲくん」

その上着が落ちないように引つ張り上げて、総司は礼を言った。だが総司は、そこで傍と屯所に戻って来たにしては静かだということに気付き、不安に駆られ進の腕を掴んだ。

「シゲくん、皆は……？」

「お前の体に障るといけないからと部屋で静かにしているぞ」

進の言葉にある結論を予測して、さつと総司の顔から血の気が引く。

「ま、まさか、言っちゃったの？」

進の腕を掴んだ手に力が入る。だが、進が首を横に振った瞬間力が抜けた。

「いや、風邪だと言っておいた。原田さんたちが看病すると煩かったが、土方さんに怒られて強制退場だ」

「よかった。じゃあ、知られた訳じゃないんだね」

胸を撫で下ろした総司に、進は人の気も知らないでと言いたげに

溜め息を吐いた。

「ああ、でも、このままじゃ知られるのも時間の問題だぞ」

「そうかもしれない。だけど、桂や坂本を切るまでは持たせてみせるよ」

決意を表すように手をぐっと握り締める。と、そこへ降ってわいた気配に二人は身を強張らせた。

「なんや、豪い啖^{えら}呵きりよるな。しばらく会わんうちに、掟破りも怖ないようなこと言うて、男らしゅうなっ たんとちゃうか」

「「遥華！」」

綺麗にはもった二人の声に遥華はクスクスと笑い、柱に寄りかかったまま、よつ、というふう^うに右手を上げる。

「久しぶりやな。元気しとったか？」

「この有様を見て元気にしていたと言えると思うのか？」

気配の主が遥華だったことで体の力は抜けたものの、突然の訪問に困ったような顰め面で進が言葉を返す。進の言葉に遥華は、布団から上半身だけを出した総司の姿を捉えた。

「見えへんなあ。せやけど、時の旅人は病なんて掛からんはずやなかったか？ まあ、これで修平が会いに行けと煩く言った訳がわかった気はするが」

遥華の視線で衣の乱れに気付いたのか、それを整えながら総司が目を鋭く光らせた。微かな殺気が部屋の温度を下げる。

「修平とか言ったあの旅人が遥華に報告したんだね。やつぱり、あの時腕の一本でも貰って、口止めしておくべきだったかな……」

さらにと総司の口から出た言葉に、遥華は顔を引きつらせ、進は勘弁してくれと顔を手で覆う。

「あんなあ、総司、別に修平に言われんでも、もうそろそろ挨拶に来よう思ってたんやで。だから、そんな怖い顔せんといてえな」

そんなに怖い顔をしているつもりはないけれどと進に顔を向けると、進むは遥華の言葉に同意を示すように首を縦に振った。

「まあ、ともかく疲れが出てるんやろ。ゆっくり休めい」

遥華はそう言つと、再び総司を布団に押し込み首筋まですつぽりと掛け布団で包む。総司は体を覆つ温もりにゆっくりと目を瞑つた。

語り継ぐ者【4】

総司が目をつぶったのを見てとって、遥華が総司からは見えない位置で手招きをする。進は総司が見ていなかったことを確認すると、総司の枕元を立った。

「遥華を送ってくる。今日はもう静かに休め」

もう半ば眠りかけていた総司は、目を開くことなく、ひらひらと手を振ることでそれを見送った。二人は連れ立って総司の部屋を後にした。

人気のないところを選んで、屯所から空間移動で神社の裏に降り立った二人は深刻な表情を浮かべ、顔を突き合わせる。

「それで、総司のことなんやけどな……あれ、禁を犯したんとちゃうか？」

さすがと言うべきか、予測はしていたが総司の病の原因を見抜いた遥華に進は肯定を示した。

「その通りだ。池田屋の一件でな」

「やつぱり、あの一件は総司の仕業やったんか。それにしても、さっきの口ぶりから察するに総司は随分と入れ込んでしもったようやな」

「あれは優しい奴だからな。訪れる別れを仕方ないものだとか割り切れなかったんだ」

進はいつか訪れる別れを仕方ないものだとか受け入れながらも、総司の思いを知り、それを後押ししたこと自嘲するように笑った。

「総司は旅人としてまだ若いからなあ。せやけど、そういうのわいは嫌いじゃないで」

もちろん、シゲはんも嫌いじゃないけどな。と、付け加えて、遥華は進の肩を叩く。

「あんさんら二人が別れを惜しむくらい近藤はすごい男らしいなあ」

「立派な志を持った男だと思っている。自分を偽らない正直な男だ」
「シゲはんにそれだけ言わせるとは、それだけで尊敬に値するは」と、遥華は笑った。

「死なすには勿体無い男だ」と、進が付け加えると、遥華はその笑いを収める。

「本当に、シゲはんにそこまで言わす男も珍しい。せやけどな、わいらは歴史を変えられはしないんや。わいらは別れを受け入れるだけ……」

悟りきったような言い方に、進は彼もまた自分と同じなのだと思います。出した。遥華もまた数々の別れを経験しているのだ。

「せやけどな、別れを受け入れたとしても、わいらの中で彼らは消えることはない。永遠を生きるわいらは、永遠に彼らのことを語り継ぎ、彼らの存在の証を残すことができるんとかやうか？」

遥華の言葉は言ってしまうえば気休めでしかないのだが、進には救いのように感じられた。

「その言葉総司に言っちゃたらどうだ？」

「言ったところで、多分総司は行動を改めんと思うで。あれはもう自棄に近い。君主の後を追って死を選ぶ、忠臣みたいなもんやな」

「誠の武士と言う訳か……」

複雑な気持ちで進が呟いた。？武士道？それが新撰組の掲げた志だ。

「旅人としての力を捨てる形で死を選んだら、自分が身を持って示してきた武士の道が消えてまう。だったらいつそのこと賭けにでたんとちやうか」

「あいつがそこまで考えているか微妙なところだがな」

「まあ、どちらにしろ、わいらが彼らを忘れんのは確かなことや」

右手の親指で自らの胸元をとんと叩き、遥華が言う。ベタな言い方かもしれないが、心の中にいつの日も生きていと言いたいのだらう。進はその言葉を噛み締めるように、衣の胸元をぎゅっと握り締めた。

「時の流れが渦巻いとる。その分彷徨い人もこの時代に引き込まれやすい。氣い付けやあ、総司を喰われへんように……。総司の思いを無駄にせんためにも」

遥華の言葉に進は自分のなすべきことを改めて実感する。未来に待つ別ればかりに目が向いていて忘れ掛けていた。

（自分は旅人と旅人を繋ぐと共に、彼らの思いをも繋ぐ存在だ。自分は、総司の思いを繋ぐ為に新撰組

（あそこ）にいるのだ）

「おまえも偶には良いこと言っんだな」

そう言っ珍しく進が笑う。珍しく笑って見せた進に目を丸くした後、遥華はぷくーっと頬を膨らませた。

「たまにはっていうのは余計や！ わいはいつだって良いこと言うとるで」

「まあそいうことしておくか……」

「なんや、その仕方なさそうな言い方」

「実際仕方ないと思ってるのだから当たり前だろ」

肩をすくめてみせた進に対して、遥華は歯を剥き出しにして耳障りな声を上げた。

「キイー！ シゲはんの阿呆！ わいもう帰る！」

遥華は背を向け立ち去ろうとしたが、進はその背を慌てた様子もなく見詰めていた。すると、遥華は数歩進んだだけで足を止め振り返った。

「これだけは覚えといてえな。わいは攘夷側にいるけどあんさんらの敵になったつもりはあらへん。見届けるためにここにおるんや。だから、あんさんらが暴れるのを止める権利はわいにはあらへん。だから、思うようにやりい」

言い終わると指をパチンツと鳴らして遥華の姿は掻き消えた。

宿の部屋に音も無く降り立った遥華は、部屋の中央で姿勢を正し

自分を待ち構えていた修平の姿に溜め息を吐いた。修平の小脇には数少ない荷物がまとめられた風呂敷包みが置かれている。

「修平これは何の真似や？」

遥華の問い掛けに修平は固く結んでいた口を開いた。

「俺はこの時代を離れようと思う」

一度はこの時代を離れることを拒んだ修平だったが、遥華を送り出した後考えずにはいらなかった。総司が旅人として過ごした日々、その中で得たモノ、そしてその決意。そのどれにも自分は敵わないのではないのではないだろうか。考えれば考えるほど、自分の弱さを見せ付けられているような気がして、気が付くと荷物をまとめ始めていた。

「なんでまた。そないな急に」

「遥華、俺は弱いんだよ」

修平は自嘲気味に笑う。

「何言わはるん。あんさんは弱などないで」

遥華の思わぬ否定に、修平は呆然とした。修平は、遥華が旅人として弱い自分を嫌っているものと思っていたのだ。

その隙に遥華が荷物を取り上げる。修平はそれを奪い返そうと身を乗り出したが、ずっと前に伸ばされた遥華の手にそれを制されて、再び畳に腰を下ろさざるを得なかった。遥華はそれを見て取って、取り上げた荷物を畳の上に下ろすと、それを背に隠すようにその手前に腰を下ろした。

「あんさんはやさしい子やなあ」

「何をいきなり言い出すんだよ！」

いつになく穏やかな表情で遥華が言った言葉に、修平は頬を染めた。

「あんさんならきつといい旅人になれると思うで、総司に負けへんくらいのな。だから、この時代を離れる必要はあらへん。それになにより、あんさんがこの時代に残ることが総司のためにもなるんや」
「蒼矢さんのために？」

総司自身は修平にこの時代を立ち去るように言った。なのに総司のためにこの時代に残れとはどういうことなのか、修平にはさっぱり話が見えてこない。

「総司が禁を犯したことをあんさんはうすうす感じていたな」

修平は一瞬戸惑いを見せたものの頷いて見せた。

「総司は禁を犯してまで歴史を変えようとした。それでも、歴史を変えることは難しい。だが、彼の、新撰組の思かれらいを見届け語り継ぐことはできる。だから、あんさんにはそれを見届けるためにこの時代に残って欲しいんや」

遥華の頼みは簡単に返答しかねるものだったが、それでも修平の中で答えはすんなりと決まった。

「わかったよ、もうしばらくこの時代に残る」

旅人として若輩者の修平には、総司の決意の行き着く先を見届けることが自らのためになるような気がしたのだった。

別離【1】

「所詮、近藤も役立たず……。どうすれば、尊王の意を示し、この時代を変えられるんだ」

人影のない部屋の中、唯一座していた男は呟きをもらした。

『そんなに時代を変えられるほどの力が欲しいのか？』

男しか居ないはずの部屋の中にどこからともなく声が響く。男は腰の刀に手をやり、すっと立ち上がり刃り廻りを見回した。しかし、人影はおるか、気配すらしない。男の首筋を嫌な汗がつうつと流れる。

「お前は何者だ。隠れてないで出て来い！」

『私はお前と同じで、力を求める者。どうだ、お前は永遠が欲しくないか？』

「永遠？」

『永遠の命のことだ』

「それさえあれば、いつの世も歴史を見守り、導くことができると言っ訳か……」

男は紙燭の光源しかない薄暗い部屋の中、不敵に笑ってみせた。

『……………』

声の主は、男の言葉に肯定とも否定ともつかない沈黙で返す。

「で、永遠の命、それを得るために私は何をすればいい？」

『お前は私の器となればよいのだよ』

カタツカタツカタツカタツカタツカタツカタツ——

乾いた音と共に部屋にビュオオオオと風が流れ込み紙燭の火が掻き消えた。そして部屋は暗闇と化したのだった。

別離【2】

慶応三年弥生伊東甲子太郎は、新撰組のやり方と自分の考えとの相違から御陵衛士として、新撰組を離れることを画策した。伊東の申し入れを受け入れ、近藤らは伊東の脱隊を許可する。そして伊東は服部らはもちろん、平助までも連れて新撰組を去って行こうとしたのである。

「平助、お前は新撰組を裏切るといふのか？」

この友は今自分の前から去っていこうとしている。

僅かに震える声で総司は平助に問うた。

「僕は裏切ったつもりなどありません。ただ、近藤先生にお逢いする前からお世話になっていた伊東先生が僕を必要としてくれている以上、その御気持ちに報いることが僕なりの武士道ですから」

（平助は騙されているんだよ。彼が本当に欲しているのは力ある者なのだから）

そんな思いが頭を過ぎったが、それを言葉にすることはできなかった。その言葉を口にしてしまえば、平助の誇りを傷つけることになることを総司は理解していた。けれども、平助の行為もまた総司達新撰組の者達の誇りを傷つけているのと変わらない。だから総司は、平助にそのことに気付いて欲しかった。

「じゃあ、平助は、近藤先生の御恩には報いる必要はないって言うのか？」

「そうは言っていませんよ。ですが、伊東先生への御恩をお返しするのが先です」

恋は盲目、言うなれば今の平助はそれに近いかもしれない。平助は自分が尊敬した自分を認めてくれた相手にどこまでも従順だ。近藤の元に居たときなら、それを平助の長所として快く思っていた総司だったが、その性格が今度は短所としてこの場面に現れたことを忌々しく思う。

総司はその思いを隠そうともせず、聞こえよがしに舌打ちをした。

「平助、君は新撰組に戻る気はないと言ったね」

その言葉には少々の嫌味が含まれていたが、答えたのはそんな嫌味などさして気にも留めない人物だった。

「その通りですよ」

それは酷く粘着質な声だった。声のした方向に目を向けると、伊東本人が塀の影から姿を現した。

「こちらから出向こうと思っていたのに、君の方から態々出向いて来てくれるとは思いませんでしたよ」

右肘を左手で支え、右手を顎に添えて伊東が笑う。喜びを表した笑みだったのだろうが、伊東の笑みはどこか無機質なもののように見えた。

「僕の方こそ、ちょうどあなたに会いに行こうと思っていたところです。探す手間が省けた」

伊東は思いがけない言葉を聞いたと驚きに目を見開く。

「まさか、君の口からそのような言葉が聞けるなんて思いませんでしたよ。とうとう、幕府の犬を辞める決心がついたのですね」

総司の目の前までやってきた伊東は「歓迎します」と手を差し出す。だが総司はその手を払い除けると、軽蔑の念を込めた視線で伊東を睨み付けた。

「何をふざけたことを。僕はあなたを始末しに来たんですよ」

総司がその言葉を口にした瞬間、伊東の隣で平助が息を呑む音が聞こえた。総司は少し心が痛んだが、腰の刀に手を掛けると、意識を伊東に集中させる。

「おやおや、私を斬る気ですか？ 時の旅人のあなたが——」
(どうしてそのことを?)

今度は総司が目を見開く番だった。

その様子を見て、伊東は再び作り物的な笑みを浮かべる。

ぞくりと悪寒が走って、総司はその寒気を振り払うかのように刀

を引き抜き、それを伊東の首筋に向けた。

「血の気の多い方ですね」

伊東は呆れたように溜め息を吐く。総司は黙れと刀の切っ先に力を込める。

ここ数年のうちにすっかり手に馴染み体の一部と化した刀から、肉に刃が食い込む感触が伝わってきた。総司はその感触に、刃先を伝わる血の滴を思い描いた。だが、血は一滴も流れず、総司は思わず刀を引いた。伊東は、涼しげな顔でにたりと笑う。

「どうしました？ 私を斬るのではなかったのですか？」

伊東の挑発にかつとなつて、総司は再び刀を振るつた。だが刃先は肉を切る以前に伊東の腕によって軽々と止められた。

続いて、空いたほうの拳が総司の腹にめり込んだ。

不覚なことに、その拍子に刀を持つ力が弱まり刀が手から離れる。それを見届けて伊東は体を離す。総司は体の支えを失つて、その場に崩れるように膝をついた。

ごほつ、ごほつ、ごほつ……。

胸から何かが込み上げてくる。この感覚は前に何度も感じたことがあった。咳き込む度に口の中に血の味が滲む。

「苦しそうですね。そんなに苦しいのなら、早く永遠など捨ててしまえばいいのに……」

上から見下ろして伊東が言う。総司は、きつと彼を睨み付けた。

すると目に入ってきたものがあった。先ほど自分が切りつけた部分から、血ではなく白いものが見え隠れしている。

（骨……？）

その考えが思い浮かぶや否や、無機質な笑みを浮かべた者の正体を察して、総司は地に落ちた刀に慌てて手を伸ばした。けれども、その行動を予想していたとばかり、伊東の足が総司の手を踏みつける。

総司は、ぐっ痛みを堪えて唇を噛み締めた。唇が切れしまったが、先ほど吐いた血のせいで、どちらの血の味かわからない。

「伊東先生、それ以上は御止め下さい」

血を吐いた総司の姿に驚いて今まで黙っていることしかできなかった平助だったが、さすがに苦しむ総司の姿に耐えられなくなったのか、総司を背に庇い伊東の前に立ちはだかった。伊東は総司の腕から足を離し、平助を忌々しげに睨み付ける。

「そこをお退きなさい。そして、あなたは黙って、私が永遠を手に入れる瞬間を見届ければいいんです」

「いいえ、退きません！」

平助は大きく手を広げて、ふるふると首を振った。だが、伊東は、平助の言うことを聞く気などさらさらなかった。

「退けと言っているんです！」

伊東は、左右に大きく広げられたうちの片腕を掴み、そのままそれを手前に引いて平助の体を払い除けた。突然のことに足の踏ん張りがきかなかつた平助は、前のめりに倒れる。伊東は平助を一瞥することもなく、総司が拾おうとした刀を代わりに拾い上げると、その切っ先を総司へと向けた。

「さあ、大人しくあなたのその力を私に渡しなさい」

そう言い終わるや否や、伊東はその刀を振り上げた。刀が空を切る音がして、総司は思わず目を瞑る。今まで数多くの人を切ってきた総司だったが、斬られる事がこんなに怖いとは思っても見なかった。

しかし、カキンツと金属がぶつかりあう音がして、いつまで経っても襲ってこない衝撃に、総司はゆっくりと目を開けた。

総司の目に最初に飛び込んだのは、刀が再び地に落ちる光景だった。次いで自分を庇うように立った黒い背中を見上げる。

始めは平助が再び庇ってくれたのかとも思った。だが、見覚えがある背中は見間違っはすもない。

「進、くん……」

のどに血が絡み掠れた声で総司はその名を呼んだ。
「遅くなつて悪かったな」

「邪魔が入ってしまったようですね」

進の背に隠れて、総司には伊東の姿は窺い知ることではできなかったが、悔しそうに伊東が履き捨てた台詞が届く。

「今回は、引かせてもらいましょうか。ですが、私は諦めたわけではありませんよ。平助！」

「はい！」

伊東の呼び掛けに平助が立ち上がる。平助は踵を返した伊東の背と総司たちを交互に見た後、ぺこりと頭を下げ、伊東の後を追いつていった。

それを見届けた後、進が振り返って尋ねる。

「大丈夫か？」

「……一応は、ね。でも危なかった。彼の目的は、時の旅人の力だったようだから」

「時の旅人の？ 人がなぜ時の旅人のことを知っていたというんだ？」

進は伊東が去った方向に目を向ける。

「彼は人じゃないよ。あれは、人の皮を被ってはいるけど、中身は確かに彷徨い人だった」

進は総司の言葉が信じられないとでもいうように、勢いよく総司を振り返った。過去何十年、何百年と彷徨い人達と対峙してきた進だったが、人の皮を被った彷徨い人など出会ったことなどない。進は総司の質の悪い冗談だと思った。しかしここは冗談をいうような場面ではない。確証あつてのことだと進も理解していた。だから進はこの次第を聞こうと口を開きかけた。

だがその時、辺りが慌ただしくなったのに気付いて口を噤まざるを得なかった。土方が、永倉と原田を連れてやってきたのだ。

「総司！」

呼びかけに応え、総司は三人を安心させようと微笑んだ。それを見て永倉と原田は表情を和らげたが、土方は状況説明を求めようと険しい表情のまま進を見た。

「山崎、伊東の野郎は？」

冷静に状況把握を試みる土方に流石だなと思いつつ、進は伊東が去った路地を指差す。

「平助と共にあちらの路地に。あくまで、御陵衛士として新撰組を離れた者達なので、脱走とも判断できず、取り逃がしましたが……」
不都合だったのでしたら申し訳ありません、と進は最後に軽く頭を下げる。

「いや、それでよかったんだ。ご苦労だったな、山崎」

進に頭を上げさせて土方が労う。進はお役にたててなによりですともう一度頭を下げた。土方はそこで確認すべき事柄を確認し終えたようで、進から総司へと意識を移した。

「悪かったな、総司。伊東が永倉や斉藤に目をつけているのはわかってたんだが、斉藤という餌を与えた以上、お前にまで手を出してくるとは予想外だった」

総司に寄り添うように腰を屈めていた永倉が、自分の名が出たことに驚いた表情を見せたが、土方が気にしていない様子だった。

「いいえ、土方さんは悪くありませんよ。悪いのはあんな奴に遅れをとった僕の無力ですから」

総司はそう言って儚げに笑った。土方達三人はその表情に思わず固まったが、すぐに原だが「お前の剣の腕で無力っていやあ、他の剣客達はいったいなんだってんだよ」と声を上げて笑い、総司の背をばしばしと叩く。その様子に、永倉は苦笑を浮かべ、土方は「総司らしい……」と呟きをもらし、総司に手を差し出した。だが、その遣り取りを少し離れて見ていた進だけは険しい表情を浮かべたまままだ。ただ一人、進の表情が見えていた総司は、そちらに一瞬視線をやったが、永倉によって原田の平手から解放され、促されるまま土方の手を取ろうとする。けれども先ほど感じた胸の内からむかむかとは込み上げてくる嫌な衝動に、差し出し掛けた手を止めた。くっ……。と、その衝動を飲み込むように咽喉を鳴らす。

（気付かれてはいけない）

総司は耐えようとした。

しかし胸を突いた痛みに、気が付けば胸に手をやっていた。

「どうしたんだ、総司？」

様子が急変したことで、再び心配そうに土方が問い掛けてくる。

けれど痛みで言葉を音にできない。

「おい、総司……」

見兼ねて、土方が総司の肩に手を添えた。その拍子に一際強い衝動が込み上げてきて、総司は我慢できずに前屈みに体を折った。

ごほっ！

口元を覆うようにやった手の指の隙間から、受け止め切れなかった血が滴り落ちる。血を失い過ぎたせいか、総司は眩暈を覚えた。（とうとうやってしまった。土方さん達に知られてしまった……）

総司は、土方達がどんな顔をしているのか見るのが怖くて、顔を上げられないまま、地に落ちた血痕を見詰めた。

「総司」

一際低い声が頭から降ってくる。怒っている、そう感じて総司は肩を震わせた。

「これはどういうことだ。なぜ黙っていた」

言い訳を探すも良い言い訳が見付からない。そのことがただでさえ良くない気分をさらに下落させた。対する土方は、いつまでも口を開こうとしない総司に痺れを切らして、総司の体調もお構い無しに、総司の胸倉を掴む。首元を絞められる形となり、総司は自然と顔を上げざるを得なくなった。顔を上げると、土方の顔がすぐ近くにある。普段、弱みを見せたがらない土方の性格を考えると、見たこともない今にも泣き出しそうな表情だ。

「おい、土方、止せ。怒りをぶつけるだけじゃ、どうにもならないだろ」

暫くそのまま顔を突き合わせていたが、原田が止めに入る。いつもは粗雑な原田だが、野生の勘とも言える危機回避能力で気まずい雰囲気や和らげてくれた。土方は、原田の言葉に、今の自分の姿が

ただの八つ当たりにしが見えないことに気付いたのだろう。舌打ちをして「わるかった」と手を離す。総司は着物の胸元を直しながら、軽く咳きをした。今度は血を吐きはしなかったが、心配した永倉が背中を擦ってくれた。それで気分が少し落ち着いたが、それでも顔色は良くないらしく、咳きが収まり礼を述べても、永倉は背を擦る手を止めなかった。

「どうやら、話は休息の後にするしかなさそうだな」
そう言って土方が溜め息を吐いた。

別離【3】

尊王攘夷の志を持つ者達と高台寺を訪れていた遥華と修平は思わぬ人物の姿を見つけ驚かざるを得なかった。

そこには、新撰組で名を馳せた伊東甲子太郎の姿があつた。何を隠そう高台寺は後に御陵衛士の本拠となつた寺である。

そんな寺の中を僧侶に案内されるまま本堂へと向かつていた修平は、伊東の姿を見つけた瞬間、廁に行くと言い遥華と共にその後を追つた。そして、辿り着いた部屋で交わされる会話を耳にしたのだ。「欲張るわけではありませんが、斉藤君だけでなく、沖田君や永倉君にも共に来て欲しかったものです」

ぱちんつと扇子を閉じる音がして、粘着質な伊東の声が聞こえる。それに気弱そうな男の声が続いた。

「そうかもしれないませんが、先日的一件はやり過ぎでしたよ」

「まあ、そう言わずに。藤堂君、ああいった天才を従わせるには、一度痛い目を見せた方が良いでしょう」

「しかし……」

納得いかない様子の藤堂に、伊東が何かを投げ付ける音がする。

「もう、しつこいですよ。この話はここで開きます。それより、お腹が空きませんか？先ほどからおいしそうな臭いがしていると思うのですが……」

「ああ、それなら、先ほど帰つた服部が買つてきた弁当の香りですよ」

また違った男の声が横から響く。

「そうですか、ではあなた達で先に頂いていて下さい。私はお客様方への挨拶を先に済ませてきますから」

そう言つて伊東が立ち上がる気配がした。摺り足と衣擦れの音が障子に近付いてくる。

部屋からは死角となつている通路の陰から顔を覗かせ聞き耳をた

てていた遙華と修平は、慌てて顔を引っ込め、声を殺して身を潜めた。シュツと障子が開く音がして、伊東の足音はまっすぐに二人へと近付いてくる。

本堂とは正反対の場所に隠れていた修平はまさかこちらに向かってくるとは思わず、身を強張らせた。伊藤の言った客とは自分達の連れで、連れの居るはずの本堂に行くものだとばかり思っていたのだ。修平は何かよい知恵はないかと遙華を見た。だが、遙華は慌てもせずに足音が近づく曲がり角を静かに見詰めていた。すると足音が角の手前で止まる。そして溜め息が聞こえた。

「出てきたらどうですか、その御二方……」

気付かれたのか、と修平は息を呑んだ。と同時に遙華がすつくと立ち上がる。修平は止めようとしたが、遙華は修平の制止をするりとかわし、男の前に姿を現した。修平も仕方なく遙華の後に続く。

「おやおや、こんなところに時の案内人がいらつしやるとは……」
そして、案内人であるあなたが行動を共にしているということは、そちらの連れは時の旅人ですね。どうりで美味しそうな匂いがあるはずです」

伊東に正体を言い当てられ、修平は困惑した。新撰組で時の旅人のことを知り得るのは総司と進二人だけだという記憶があったために、その言葉は修平を困惑させるには十分だったのだ。さらに修平は、遙華の態度からして相手が歓迎すべき人物ではないことを感じ取っていた。

「どうしてお前のような奴が、人の皮を被ってこんな所にいる……」
いつもよりトーンは低い声で遙華が言う。いつものふざけた関西弁口調は取り払われている。

「さすが、案内人、すぐに気付くとは天晴れです。ですが、その言い方はいただけませんね。こうなることは体を提供してくれた本人が望んだことなのですから」

「何？」

遙華は信じられないと目を丸くした。

「本当ですよ。この男は、国を、言うなれば歴史を変えられるような力を欲していた。だから私は男に言ったんですよ。永遠が欲しくないか、と。何も知らないこの男は、永遠さえあれば、命尽きることもなくこの国を未来永劫導くことができる喜び、力が欲しいと即答しましたよ。そうならばもうこっちの者、この男に取り憑くのは容易かった」

伊東、否、伊東の中の者は、自らの計画に酔い痴れる様にうつとりと宙を仰いだ。

「馬鹿な！ 彷徨い人にそんな能力があるなんて聞いてことがない」
（彷徨い人！）

遥華の口から出た言葉に、修平は遥華と伊藤を交互に見やった。男はそんな修平を嘲笑うかのように口元に弧を描く。それは肯定の証だった。

「馬鹿はお前達の方ではないか。私はこの寺にお前達が来た時から、お前達の存在に気付いていたというのに、お前達ときたら、私が行動を起こしてやっと気が付いたのだろ。実に、滑稽だ。まさに飛んで火に入る夏の虫と言ったところか」

「言わせておけばぬけぬけと……お前の正体が分かった以上、黙って見過ごすと思っているのか？」

修平はかつとなつて言い返す。けれども、遥華は何か気付いたのか苦汁を飲んだような顔をした。

「黙っていてもらう必要なんか傍からありませんよ。そもそもお前達は、この場で私に喰われるのだから」

伊東は一步一步距離を縮めている。

修平は男を威嚇するように、腰にあった刀を抜いた。

剣の腕にはそれ程自信がある訳ではなかったが、自分の身を守る剣くらいは心得ているつもりだ。

「お前にそれができるのか？ 私の依り代となつたこの男は本来、このような場所で死ぬ人物ではない。もしここで私を殺せば、それこそお前達の言う歴史を変える行為であり、掟破りをするということと

意義なのだぞ」

伊東の言葉に、修平の剣に迷いが生じる。伊東の言葉を真つ向から信じた訳ではなかったが、伊東が懷に飛び込むには十分な時間だった。修平は咄嗟に刀を引き、その腹で男の拳を受け止めた。しかし、常人離れした彷徨い人の力で本気で殴られたため、勢いを殺し切れず廊下を数メートル飛ばされる。受身を取って尚、背がずきずきと痛んだ。その上、飛ばされた拍子に刀の刃に触れたのか、頬が切れ血が流れている。

「さて、どちらが先に喰われたいのかな」

その血を見て興奮した伊東は、舌なめずりをする。修平の方に足を進めた。修平の方を先に喰らうことに決めたらしい。

しかし、遥華のちょうど真横を通り過ぎようとした時、今度は伊東が吹き飛ばされた。遥華に目をやると、怒りに顔を赤らめて拳を握り締めている。完全に遥華はキレていた。修平は遥華の怒った姿を見たことがなかったが、知人達から何度も遥華を怒らせるなど言い聞かされていたのを思い出した。彷徨い人の出す被害の方が大きいか、キレた遥華の出す被害の方が大きいか。どちらにせよ、二人を止めるのは至難の業だ。

「さつきから、こつちが黙ってりやぬけぬけと。要は、この場でお前が死ななければ、何をしようが構わないんだろ？」

遥華が床に伏した伊東にゆっくりと歩を進める。だが伊藤まであと二、三步という所で、舌打ちをして足を止めた。そして、ぎしと建てつけが悪い部分が鳴ったかと思うと、修平の隣に遥華の姿が現れる。体を打ち付けた痛みに暫く立ち上がれなかった修平は、ひんやりとした感触の板張りの床に座り込んだままだったが、遥華に腕を引かれ立ち上がった。立ち上がる直前、向こうからやって来る複数の足音と振動が伝わってきたため、遥華が舌打ちをした理由を理解した。

「奴の張っていた結界がさっきの衝撃で解けたんだ。物音を聞きつけて人が集まりだした。殴り足りないが、分が悪い。退くぞ」

関西弁ではない遥華の喋りには未だ慣れなかったが、修平は素直に頷いた。そこに、一陣の風が巻き起こって、床の埃を共に巻き上げて二人の姿を包む。遥華がぱちんと指を鳴らすと、その風が弾け飛び、一瞬のうちに二人の姿はその場から消え去った。

別離【4】

伊東一派が去った日、永倉と進に支えられ、さらに土方と原田に付き添われる形で屯所に帰り着いた総司は、その日から数日の間熱を出して寝込むこととなった。

土方達にしてみれば、総司に早く回復してもらい事情を聞き出したいようであつたが、総司にとってはいつまでも熱が下がって欲しくないというのが本音だ。

そのためか熱の下がりには遅かつたが、結果的にそれは恐怖の日を先延ばしにただけでしかなかったのだと、近藤の部屋の前に立ち総司は思った。山南の切腹の時すら比にならない緊張感に、この日が死刑宣告の日に思えてならない。総司は、少しでも気持ちを落ち着かせようと深呼吸をした。そして意を決して襖に手を掛ける。

「沖田総司参りました」

入れ、と中から近藤の了承の声が聞こえて襖を開く。

部屋の中には近藤を中心に、総司から見て右に井上、原田、左に土方、永倉と試衛館時代からの主だった者達が集まっていた。本来なら、平助や山南もこの場に居たはずなのにと、少しの寂しさを覚えながら部屋に足を踏み入れる。

五対の瞳が総司の姿を捉えて放さなかった。総司は顔を俯かせたのは山々だったが、そうすることもできず、真正面に位置する近藤の視線を捉えると、後ろ手に襖を閉めた。すると、部屋が閉ざされ、重苦しい空気が辺りを包む。そんな中、始めに口を開いたのはやはり近藤だった。

「総司、座りなさい」

総司は言われるまま、近藤の正面に置かれた座布団の上に腰を下

ろした。

「まずは、熱が下がってよかった」

それを見届けて、近藤がやんわりと微笑んだ。けれど飴と鞭をうまく使い分ける近藤さんのことから、次にくる言葉はきつと核心を衝いてくるに違いない。総司は膝の上で握った拳に力を込めた。

「だが、今回は決してお前の熱が下がったことを祝うために集まった訳じゃない。今回呼ばれた理由は、お前が一番よく分かっているな、総司」

やはり核心を衝いてきた近藤に、否、と言う訳にもいかず、総司は首を縦に振った。その様子が脅えた子供のように見えて、近藤は幼い日の総司の姿を思い出した。自分や姉に心配を掛けまいと傷を隠していたことを叱ったことがあったが、今の総司の表情は、まさにその時のそれであった。

「何も俺達は揃ってお前を断罪しようとしている訳ではないのだよ。お前の性格はよく心得ているつもりだ。だからお前が皆に心配を掛けまいとしていたことも分かる。だが、知ってしまった以上はこのまま見てみぬ振りをできないということを分かってくれ」

総司もまた幼き頃から慣れ親しんだ近藤の性格を理解している。そして、近藤の優しさは時に凶器であることも感じとっていた。だから総司はその凶器で傷を負う前にと、先攻をきった。

「黙っていたこと、そのために余計な心配を掛けてしまったことにはお詫びします。ですが、これを理由に僕を除け者するようなことはなさらないで下さい」

総司の言葉に、近藤は太く勇ましい眉を顰めた。やはり、静養を言い渡すつもりだったようだ。そう考えを巡らせつつ、総司は目を離すことなく近藤をじつと見詰め答えを待った。その瞳の映し出す色に近藤は、答えを考えあぐねているようだった。それを見兼ねて、土方が口を挟む。

「確かに戦力としてのお前の力は申し分ない。しかし、それは同時に諸刃の刃だ。戦闘中に敵の攻撃を受けないにしても、先日みたい

に血を吐いてみる。隊士達の士気は下がり、不安が蔓延する」

土方は暗に総司をこのまま新撰組に置いておくことはできないと言っていた。だが、総司は引き下がらなかった。

「じゃあ、戦闘中は絶対に血を吐きません。他の隊士達が不安がないように気を付けますから！」

「そんなことが可能だとお前は思っているのか？ 先日だって、俺達の前で我慢しようにも我慢できなかったお前が……」

「それでも僕は、新撰組と共に在りたい。近藤さんの力になりたい。僕はもう新撰組の一員でいちゃいけないんですか？」

理屈的には土方の言い分の方が正しい。だが、総司の健気な訴えに土方は口ごもり、申し訳なさそうに近藤に視線をやった。近藤は二人のやり取りを聞き意見がまとまったのか、後は自分が引き受けたと土方に頷くと、すつくと立ち上がり総司に歩み寄った。総司は近藤が何をしようとしているのか分からず、体を硬くして、近藤を見上げた。すると近藤は総司と視線を合わせるように膝を折った。

「総司、お前がどれだけ新撰組を大切にしているか分かった。いや、はじめから分かっていたと言った方がいいかも知れん。俺はその思いを利用しようとしているだけなのだ。それでもお前は今まで通り俺に力を貸してくれるのか？」

総司は涙を堪えながら力強く頷いた。

「そんなこと聞かれるまでもありません。僕はこの命ある限り近藤先生についてきます」

一瞬複雑な表情を浮かべ、しかし近藤はありがとうと総司の肩を叩いた。その時ふと別れが近付いているような気がして、総司は思わずその腕に縋るように手を伸ばした。

（自分が絶対守って見せるから、だから絶対に自分を置いていかないで……）

そんな思いで胸が一杯だった。

守りたかったモノと守れなかったモノ【1】

「態々呼び出してすまんかったな」

京の祇園その中で最も格式高いと言われる妓楼の奥座敷で、遥華は進を出迎えた。

進は場所が場所だけにあまりいい顔はしなかったが、二人が敵対する組織に属している以上、このような場所になったことは仕方がないことだ。

格式高い妓楼と言うものは、新撰組の隊士達には到底手の出るものではなく、進の姿を見咎める者がいない。その上遊女達は、下手に客の私情を口外することが自分のためにならないとよく知っているため口が堅いのだ。

「いや、構わない。丁度、俺も話しておかなければならないことがあったからな」

そう言つて進は遥華と向かい合うように腰を下ろした。タイムミングよく遥華を囲むようにして寄り添つていった女の一人が、酌をしようと寄つてくるが、進はそれを手で制して酌を断ると遥華に目を向けた。遥華は少し名残惜しそうにしたものの、進に倣つて、飲み干した杯に再び酒を注ごうとしている女を制し、女達皆に部屋から出て行くように指示を出した。

一分も経たないうちに、むせ返るような香の香りを残して遊女達は部屋を出て行った。

それを確認して、進が口を開く。

「遥華、新撰組に居た伊東甲子太郎という男を覚えているか？」

「ああ、この間会ったばかりや。わいがあんさんと呼び出したのは他でもない、その男についてなんやけどな。どうやら、グットタイミングやったみたいやな」

進は、遥華の返答に驚きの声をあげる。

「お前、奴に会ったのか！」

「せや、高台寺でな」

「そうか、それなら話は早い。それで、奴のついてどう思った？」

「伊東甲子太郎……というより、奴の皮を被った時の彷徨い人のことか？　せやな、人の皮を被り、人に紛れ込むなんて事例聞いたことあらへんな」

「俺も、総司の話を聞いた時、悪い冗談ならよいのにと思ってたくらいだ。しかし、俺も実際奴に会っている。あの身のこなしは確かに彷徨い人のものだった。どうして、そのような能力を持った者が現れたのか……お前は どう見る？」

「これはわいの憶測でしかないんやが、総司が池田屋で禁を犯したために、歴史に歪みが生じた。その歪みを調整する力が悪い形で働いたんやろう」

遥華は遊女達が残っていた銚子から杯に自ら酒を注ぎ直すと、その水面にふーっと息を吹きかけて見せた。

酒の表面に波紋が生じて消える。

「皮肉なことだが、歴史上本来脱走するはずのなかった山南とか言う副長はんの脱走も、新撰組から離別するはずのなかった伊東や藤堂が去ったことも、皆歴史が歪みを直そうとしているがため……それをきっかけにその彷徨い人は力を得た」

「なるほど、ではこれ以上あのような彷徨い人の出現を危惧する必要はないのだな」

「わいも歴史の歪みがどれほど大きいかはわからへんから、断言できへんけどな、おそろく大丈夫やろ」

その言葉に進が僅かに安堵の表情を見せた。だが遥華は重苦しい雰囲気を取り払うことなく話を続けた。

「だが、安心するのはまだ早い！　わいが仕入れた情報では、伊東は近藤の暗殺を企てているようや」

「近藤さんの？」

（総司には絶対に聞かせられない内容だな）

「伊東は近藤さえ居なくなれば、総司が生きる意味を失くして、永

遠を差し出すと考えたんやろう」

それは突拍子もない考えのように聞こえたが、その実的を射て、進はまた厄介な事になりそうだと頭を抱えなくなった。

進むが遥華から仕入れた情報を手に土方のもとを訪れると、そこには先客が居た。近藤、土方の命により間者として伊東の動きを探っていた斉藤一であった。

「おう、山崎良いところに来たな。ちょうど斉藤に報告を受けていたところだ」

土方が斉藤に目を向けると、斉藤は進に向けて軽く会釈をした。進も会釈を返して、斉藤の隣に土方と向かい合う形で腰を下ろす。それを見て取って、土方が話を始める。

「斉藤の話によると、伊東は近藤さんの暗殺計画を立てているようだ」

進は土方の言葉に、存じていますと頷いた。

土方は今しがた斉藤から得たばかりの情報だったので、まさか進が知っているとは思っていなかったのか、僅かな驚きの色がみとれた。だが、立场上すぐにそれを引っ込め話を続ける。

「事のあらましはこうだ。強風の日を選んで新撰組屯所を焼き討ち、その混乱のなかで幹部らを討ち取り、その上で伊東が新撰組局長に就任し、組織ごと尊王集団に変えてしまおうということらしい」

「して、こちらはどうか動くおつもりですか？」

「もちろん、このまま伊東を野放しにしておくつもりはないさ。これを機に、伊東一派を一掃する」

進が問うと、土方はにっと清々しいまでの笑いを浮かべた。その顔にはやつと邪魔者を片付けられるという喜びが表れている。

「まあ、ともかくだ。この件は近藤さんに報告し次第、追って連絡する。それまで、他の隊士には絶対に口外するなよ。とくに、総司には、な」

総司の病のことを知った土方は、進と同じ懸念を抱いたのだろう。
だから総司には絶対伝えるなと強く釘をさしたのだ。

守りたかったモノと守れなかったモノ【2】

「近藤から文が来ているだ？」

尊王思想家達との会談を終え、高台寺の本拠に帰り着いた伊東は、斉藤の差し出してきた文に顔を顰めた。だがその文を破り捨ててしまふ訳にもいかず、しぶしぶといった様子で受け取りとそれに目を通す。

「活動資金の件を含めて国事について意見を交換したい。つきましては貴殿を我が妾邸に招待したい、だと……」

あくまで表向き、新撰組との友好関係を保ってきた御陵衛士は、以前から新撰組に活動資金の用立てを申し入れていた。本当はその申し入れが受け入れられようが、受け入れられまいがどうでもよかった伊東だったが、全く警戒の色もなく自分を招こうとする近藤に、計画の成功を予感して、唇に弧を描く。

「絶望に彩られる近藤の顔を想像しながら酌み交わす酒も悪くない。この招待お受けしようじゃありませんか」

その言葉を聞き、側に控えていた斉藤は、伊東に気取られないように顔を伏せた。その唇にもまた、弧が描かれている。そうこれこそが、近藤と土方が考えた、伊東暗殺の序章だったのだ。

そして夕刻、たった一人の供を連れ、文の通り招待をうけた伊東がやって来た。

「お招き感謝しますよ」

出迎えた近藤と土方に促されるまま、伊東は宴席の席についた。和やかな雰囲気の中で伊東は、勧められるがまま杯を重ねる。

（そうやって笑っていられるのも今だけです。精々今のうちに楽しんでおくことです）

酒を飲み交わす間、伊東は始終笑い声を上げる近藤を胸の内で嘲笑っていた。だが、胸の内は近藤、土方も同じといってよかった。

この先自分のみに何が起こるかも知らずに嬉しそうに顔を緩め、

酒を飲む伊東の姿があまりに滑稽で、笑わずにはいらなかったのだ。そして互いが互いの思惑を胸の内に秘めたまま、午後十時頃宴はお開きとなった。その時既に伊東はかなり酔いが回っていた。妾邸を出た伊東は、ご機嫌で唄などを口ずさんで帰路についた。

そして油小路にさしかかった時、事は起きた。

突然目前に現れた四つの人影が現れたのだ。

「誰だ！」

伊東はすかさず身構えた。夜道で堤燈の明かりだけが頼りの上に、その人影は黒い頭巾で顔を隠しており正体を窺い知ることができない。伊東は酒の回ったくらくなる頭で懸命に事態の打開策を考えた。だが急を要する事態への焦りから、中々良い案が浮かばない。そうしてもたついていると、四人の一人が業を煮やして斬りかかって来た。泥酔しながらも寸でのところ伊東はそれをかわした。けれども、供として連れてきた男は、最初の攻撃を避けきれず腕に傷を負って痛さに地に膝を付いた。

「冗談めされるな」

酔いのためふらつく足では満足に戦えないと判断した伊東は、油小路を後ずさった。だが伊東を逃がすまい槍を手にした男が、その槍で伊東の胸を一突きにした。その衝撃で伊東の体が地に伏した。従者の男はその光景にひっと小さな悲鳴を上げたが、四つの人影はそれを気にせず、伊東の死を確信して音もなく去っていった。残された従者は、あまりのことに暫し呆然としていたが、傷口から血を流しながらも、高台寺の仲間らに事の次第を知らせるべく慌てて駆けだした。

「私としたことが不覚でした……」

人影が去り、従者が事態を知らせに駆けていった後。数刻経つと、伊東は何事もなかったかのように立ち上がった。

衣の胸の部分には、槍により開けられた穴と、その穴の縁を彩るように血がこびり付いていたが、胸に受けたはずの傷は見受けられなかった。

時の彷徨い人たる伊東は、槍で一突きにされたくらいでは死ぬはずがなかった。時の彷徨い人を無に還せるのは、唯一守人の血だけなのだ。

本光寺方面に向けて歩きながら、酔いが和らいで冴え始めた頭で思考を巡らせ、伊東は刺客を差し向けたのが近藤達であったのだと思いつた。そして悔しそうに唇を噛む。しかし、自分の正体を知らなかった近藤の誤算を思い、すぐに機嫌を直した。

「全く、詰めが甘い。それにしても、殺したはずの人物が目の前に現れたら、あの方々はどんな顔をするのでしょうか。楽しみです」

伊東は楽しそうに笑い声を上げたが、その嗜好の時に間をさす声が響く。

「詰めが甘いのはどつちかな？」

聞き覚えのある声に伊東は身を強張らせた。

「先ほどまでの威勢はどうしたんだ？」

声の主は笑い、きらりと刃が舞った。伊東が何が起こったかわからないうちに、ぼたりっという音がして地に自分の腕が落ちているのに気がついた。地に落ちた腕は音もなく白い砂へと化す。

「守人、山崎進か……」

利き手を失ってもう抵抗する手段もないに等しい伊東が、憎憎しげにその名を口にした。旅人の力にばかり目が行き、新撰組に守人が居ることを忘れていた自分を自嘲したい気持ちにおそわれる。まさしく自分こそ詰めが甘かったのだ。

「彷徨い人は無に還れ！」

進がそう高らかと声を上げ、再び刀を振るう。そして、これが、今度こそ伊東の最期だった。

守りたかったモノと守れなかったモノ【3】

「随分と呆気なかったなあ」

物陰から姿を現せた遙華が、砂となってしまった伊東の体を見て
眩きをもらした。

「そうだな。色々と厄介事を引き起こしてくれた割にはな」

「ところで、伊東の遺体が原型残してへんのは大丈夫なんか？」

「ああ、問題ない。修平に代わりの手配を任せた」

いつの間にそんなに仲良くなったんや、と最近自分に対して少々
無愛想な進に対する不満を含んで遙華は溜め息を吐いた。

「まあ、何はともあれ、伊東が死んだことで総司が喰われる心配は
なくなった訳や」

「ああ。だが、まだ一仕事残っている」

「御陵衛士残党の一掃やな」

簡単なことのように言う遙華に進は眉を寄せる。その進の表情に
遙華は不思議そうに首を傾げた。

「御陵衛士には総司と仲の良かった藤堂平助がいる」

ああそれでか、と進の言葉に遙華は納得した。

土方には知らせるなと釘を刺されているが、総司の知られるのも
時間の問題だろう。進はこのまま事を運んで、ただでさえ不安定な
総司の心を傷付けてしまうのを危惧しているのだ。

「それでも、やるしかないんとちゃうか」

そう言つて遙華は進の肩を慰めるように叩いた。

新撰組屯所では、昼に見廻りあつた疲れから、早くに床に就いた総司が、眠い目を擦り廁に向けて歩いていた。そして、廁から出てくると総司は慌しく行き交う隊士の姿を見咎めて、首を傾げた。

（あれは、永倉さんの班の隊士達だ……。何か大きな捕物があつたのだろうか？）

「急げ！ 御陵衛士の奴らが到着する前に七条油小路に到着しなければならぬ」

（御陵衛士！ まさか、平助が！）

隊士の声を聞き取った総司は、居ても立つてもいられず慌てて部屋に帰ると、愛刀を手にすると油小路に向けて駆け出した。夜風が病を患っている体に沁み、息が上がり苦しかったが、今はそれどころではない。

一方、町役人らしき男から、御陵衛士屯所で「何者かが先刻、伊東氏に深手を負わせたので、早々にお引き取りくださるよう」に」という知らせを受けたのは、三木三郎、篠原泰之進、服部武雄、藤堂平助、加納鷲雄、毛利有之助、富山弥兵衛、橋本皆助の八人だった。愕然とした八人は、伊東の身を案じて直ぐに駕籠を雇って、七条油小路に向かうことにした。

八人が七条油小路に到着した時、時刻は午前零時をまわろうという頃だった。

「伊東先生」

変わり果てた伊東の姿を目にして、平助は悲しそうに目を伏せた。残る七人も同じように目を伏せて、悲しみや怒りを紛らわそうとする。けれども暫しの間悲しみに沈んでいた一行だったが、このまま伊東の遺体を晒しておく訳にはいかない。誰からともなく駕籠の垂れ幕を上げ、伊東を駕籠に乗せた。そして、皆で揃って黙祷した後、平助がその垂れ幕を下ろそうとした——まさにその時だった。

夜の静粛を切り裂いて、一発の銃声が響き渡った。それと同時に物陰に隠れていた新撰組の隊士達が一斉に襲い掛かる。

平助は背後から一刀を浴び傷を負いながらも、腰から刀を引き抜

き振り向いた。しかし振り向くと、斬りかかってきた相手は新撰組でも顔見知りの男だったのである。そのことに平助は驚愕し、一瞬の隙が生まれる。それが命取りだった。二太刀目を顔面に受け、平助は絶命した。

服部と刀を交えながら永倉は平助の最後を見た。

「平助がくるかもしれない。もしきたら助けるように」

この計画のあらましを聞かされた時、近藤が言った言葉が永倉の脳裏を甦ったが、今となってはそれは気休めでしかなかったのだろう。自分と相對した人物を始末し、永倉は刀についた血を払った。

守りたかったモノと守れなかったモノ〔4〕

「平助！」

総司が息を弾ませて事の現場に辿り着いたのは、すべてが終わってしまつた後だった。平助が血溜まりの中に倒れている。顔には大きな切り傷があつてなんとも痛々しかった。総司は迷わず平助に駆け寄つた。だが、平助はもう既に息をしていない。

「もう試衛館時代あのころには戻れないのかな……」

平助の亡骸を膝に抱き総司は涙した。頬を伝つて落ちた涙が、衣に付着した、乾ききつていない血を滲ませている。他の隊士が服部の遺体を片付けて引き上げて行つた中、永倉と原田はただ総司が泣き止むのを待つことしかできなかった。

この後、王政復古の大号令により將軍は権威を失い、旧幕府側に付く新撰組は戦いの中に身をおいた。戊辰戦争を経て、次第に窮地に追いやられていく新撰組。永倉は総司の言葉に思うところがあつたのか、皆変わってしまった、と原田と共に新撰組を離脱する。また、戦いの中、新撰組の名を伏せ、名を甲陽鎮撫隊と改めた一行に同行していた総司は、予期せぬ早期の敗走により江戸に戻ることになる。そして、度重なる戦いの中で病状が悪化していた総司は、今度こそ療養を言い渡される。

「僕は……つま、だ、戦えます……」

咳き込みながら言葉を続ける総司に、近藤は首を横に振つた。

「もういいんだ、総司。お前は病を治すことだけを考える」

もうこの病は治すことができない段階までできていることを感づいている。それでも尚、そんなことを言うのかと総司は近藤の優しさを恨めしく思う。

しかしやはりこればかりは譲れない、と総司は近藤を見詰めた。

近藤は顔を背けただけ、その命令を撤回しようとはしない。

「お前はもう肩の荷を降ろしていいんだ」

それが総司に向けられた最後の言葉だった。

近藤は総司を残し再び戦いに身を投じたが、この一カ月後、近藤は新政府軍に投降をすることとなる。

進んだ先に

「僕は近藤さんに志を貫き死んでいった父の姿を照らし合わせていたんだ」

と総司はもう床から起き上がることもできない体でもって、咳き込みながら呟いた。だから、尚更死なせたくはなかったのだ、とも総司の枕元に座し、まるで懺悔の様なその言葉を聞いていた成則は、水で冷やした手拭で総司の額に浮かんだ汗を拭き取ってやった。いつも言葉を掛けてくれるみつとは違うが、これがこの男なりの優しさだと知っている総司は、友の優しさに感謝しながら言葉を続ける。

「僕はね、シゲ君。例え、掟を破ってこの身がどうなるうとも、近藤さんたちがいつものように笑っていてくれたらそれでよかったんだ。だけど、どうやって歴史は変わらなかった」

成則はそこで手を止め、総司を見据えた。

「山南さんが死んで、平助が去って、そして結局は近藤さんも助けることができないんだ。いや、助けることができなかったといった方が良くのかもしれない……」

そこまで言って、総司は再びごほりつと咳き込んだ。布団の上に血が飛び、沈黙が部屋を支配する。

結局自分は何一つ守れなかった。こんなことなら、あの日遙華の手を取らなければよかった。

総司はそう思ったが、あの手を取らなければ、今までの思い出も手に入らなかっただろうと思うとそれはただの弱音でしかない。だから、結局、総司は遙華に感謝している。床に伏し、もう剣を取れないとわかった時、総司は茂則にそう言っていた。

「総司……」

いいからもう喋るなどでも言いたげに、名で制して、成則は布団に飛んだ血を拭き取った。だがその行為は、血の跡を大きくするだ

けで、総司の犯した罪を告知するようにはつきりと存在を残している。

「シゲ君、頼みがあるんだ」

自分の余命を察したのか、総司は弱弱しい声で言った。事実、時の旅人である総司は自分の余命を知っているのかもしれない。

「何だ」

「これを、近藤先生に」

そう言つて、総司が血に濡れた手で差し出したのは、一通の手紙だった。成則は黙つてそれを受け取り、確認する。表には、下手くそな字で、近藤勇様、と総司が慕い守りたいと思つた男の名が書いてあつた。

手紙

慶応四年卯月。

官軍へ投降した近藤は、刑執行の日取りも決まり、昔を思い出すように一人静かに物思いに耽っていた。多摩の田舎侍だった近藤が京に出て、新撰組の局長にまでなったのは、一重に多くの仲間の助けがあつたからこそであつた。彼らの顔を思い出す度、近藤はそれが自分にとって勿体無いほど、充実した人生だったのだと思う。しかし、だからこそ、

（これはその代償なのかもしれないな）

近藤はそんな風に思うのだ。同時に、彼らがこの先、無事で居て、幸せな時を送って欲しいと思うのは自分の我が儘だろうか。仲間の顔が思い浮かんで消えてゆく。その中であつて総司はいつも笑顔で、自分の名をん呼んでくれた。

（せめて、もう一度総司に会えたらよかったのに……）

近藤がそう思ったその時、

「近藤先生」

と、声が聞こえた気がして、近藤はゆっくりと目を開けた。しかし、人の姿などどこにもない。気のせいかと再び目を瞑りかけたが、「近藤先生」と今度は確かに聞こえた声に、近藤は部屋の隅へと目を向けた。

先ほどまで人影のなかったそこに、見知った男が立っていた。自分の記憶が正しければ、新撰組の觀察方の山崎進と言う男であつたはずだ。だが、近藤は自分の目を疑つた。外には見張りが立っていて、気付かれずに入ることとは不可能なはずだ。だが何より驚いたのは進の装いだった。

立场上、度々洋装を見てきた近藤だったが、進の装いはそれのと

れとも違っていた。進は全身黒で統一した衣装で、見たこともない色あせた生地で作られたズボンを穿き、羽織ったロングコートの上からは、十字にも似た赤い印の付けられた鞆をさげている。

「山崎君、なぜ君がここに？」

驚きを隠そうとせず近藤が口を開くと、山崎は腰を折り頭を下げた。

「この姿では初めまして、近藤勇。俺の名前は成則」

山崎の名乗った名に聞き覚えがなく、近藤は首を傾げる。

「君は、山崎君ではないのか？」

「いや、その名もまた俺を示すもの。時の流れの外に身を置く者は、いくつもの名を持つ。この時代では俺は山崎進だった。だが今は、時の郵便屋成則としての任を果たしに来た」

「時の流れ？ 時の郵便屋？ それはいつたい何のことだ」

「人は時の流れに逆らうことはできない。だが、その時の流れに逆らって旅をする者達がいる。それが時の旅人であり、その旅人から預かった文を届けるいわば飛脚が時の郵便屋である俺だ」

「もしそれが全て真実だとして、時の郵便屋が俺に何の用だ？」

近藤の問い掛けに、成則は郵便マークの入った愛用の鞆から文を一つ取り出した。

「蒼矢、いや、総司からです」

近藤は文と成則を交互に見比べた後、文を受け取ると、目を皿にしてその文に目に通す。文に目を通すにつれ、近藤は何度も何度も罵倒を漏らしながら目に涙を浮かべた。

「馬鹿野郎…… 一人で背負って、一人で悩んで、最後に俺を助けられなかった自分を赦して下さいだ」と

涙が頬を伝って紙の上に落ち、文の字が滲んでいく。近藤は、一通り目を通すと震える手で文を握りつぶした。

「そんなこと自分で言いに来やがれ。そうすれば、俺は笑って赦してやったのに」

（寧ろ謝らなければならないのは俺の方だ）

おそらく近藤が京に行くなどと言い出さなければ、総司は苦しむことなどなかっただろう。それを思うと悔やんでも悔やみ切れない。自らが掲げた志は総司を苦しめただけだと思うと情けなかった。

「俺の志もまた結局は何も守れちゃいなかったのかもしれないな……」

ぽつりと弱弱しく呟いて、近藤は握り潰した文へと視線を落とす。「それでも、あなたの志に人が集まり、そして自分も惹かれずにはいられなかったのだと総司はもらしていましたよ。だからこそ総司はあなたを守り、禁を犯してまでその志を叶えさせてあげようとした。その結果、自らの命が失われようとも構わないという決意があった」

茂則野言葉に、近藤は目を瞬かせる。

「総司もまた、あなたと同じくらい頑固で、強い志を持った者なのです。近藤局長」

それは茂則と言う男の、山崎進としての言葉だったのだろう。

「ああ、分かっているよ。俺もあいつも新撰組の奴らは馬鹿ばかりだ」

涙の跡がこびりついた顔で近藤が笑った。その笑顔は総司がいつも求めていたものだった。

手紙（後書き）

ころころと場面が変わり読み辛かったかもしれませんが、ここまで読んでいただきありがとうございます。

古い作品ではありますが、ご意見ご感想残していただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9014k/>

進む先に見つけた場所

2011年11月13日03時14分発行